雲南市埋蔵文化財調査報告書　第７集

高　瀬　山　城　跡

消防救急デジタル無線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１３年３月

雲　南　市　教　育　委　員　会

雲南市埋蔵文化財調査報告書　第７集

高　瀬　山　城　跡

消防救急デジタル無線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年３月

雲　南　市　教　育　委　員　会

序

雲南市教育委員会では、雲南消防本部からの委託を受け、平成23年度から平成24年度にかけて、消防救急デジタル無線整備にともなう高瀬山城跡の埋蔵文化財発掘調査をおこないました。本書はその調査の報告です。

これまで、高瀬山城跡から遺構は見つかっていなかったため、その存在に懐疑的な意見もありました。しかし、今回の調査で、堀切や土塁などを確認し、山城であることが証明されました。

また、中世の遺構に限らず、弥生時代前期の土器や古代の土坑など、古い時期の遺構が発見されたことも、大きな成果であります。

今回の調査成果が、地域の歴史を解明する一助となり、文化財への理解や歴史学習を深めることに役立てば、幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から、ご協力、ご指導をたまわりました地元の方々および雲南消防本部ならびに関係の皆様方に対しまして、心より、感謝申し上げます。

平成25年（2013）３月

雲南市教育委員会

教育長　土　江　博　昭

例　　言

1．本書は、雲南広域連合の委託をうけて、雲南市教育委員会が平成23年度と平成24年度に実施した、消防救急デジタル無線整備にともなう高瀬山城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査地の所在地は以下のとおりである。

第１次調査　島根県雲南市三刀屋町多久和1055-1　外

第２次調査　島根県雲南市三刀屋町多久和2502-35

3．調査は下記の期間に実施した。

第１次調査　平成23年12月７日～平成24年５月10日

第２次調査　平成24年度　平成24年７月19日～平成24年11月２日

4．調査体制は次のとおりである。

【平成23年度】（発掘調査）

［調 査 主 体］雲南市教育委員会　教育長　土江博昭

［事　務　局］安井　修(雲南市教育委員会教育部長)、小山　伸(同教育部次長)、小川　浩(同社会教育課長)、山崎　修（同社会教育課文化財・文化振興グループ統括主幹）

［調　査　員］坂本諭司（同管理監)、高橋誠二（同埋蔵文化財専門員)、安川賢太（同臨時職員）

【平成24年度】（発掘調査・報告書作成）

［調 査 主 体］雲南市教育委員会　教育長　土江博昭

［事　務　局］**福間克巳**(雲南市教育委員会教育部長)、小山　伸(同教育部次長)、小川　浩(同社会教育課長)、山崎　修（同社会教育課文化財・文化振興グループ統括主幹）

［調　査　員］高橋誠二（同埋蔵文化財専門員)、安川賢太（同臨時職員）

5．現地調査及び報告書作成にあたっては、多くの方からご指導やご協力を賜った。ここに記して深謝したい。（※五十音順、敬称略、職名は平成24年度時点）

［調 査 指 導］今岡一三（島根県教育庁文化財課企画幹)、小都隆（日本考古学協会会員)、新川隆（大田市教育委員会教育部石見銀山課)、高屋茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館学芸員)、田中義昭（島根県文化財課保護審議会委員)、西尾克巳（大田市教育委員会教育部石見銀山課)、目次健一（島根県教育庁文化財課世界遺産室専門研究員)、山根正明(松江市教育委員会文化財課史料編纂室専門官)

［発 掘 作 業］吾郷弘子、加納幸扶、佐藤文則、藤原孝夫、持田十久男

6．本書の刊行にあたり、次の方から玉稿を賜った。記して敬意を表します。

山根正明（松江市教育委員会文化財課史料編纂室専門官）

渡邉正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

7．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標Ｘ軸の方向を指す。また、平面直角座標系ＸＹ座標は世界測地系による。高さは海抜高を示す。

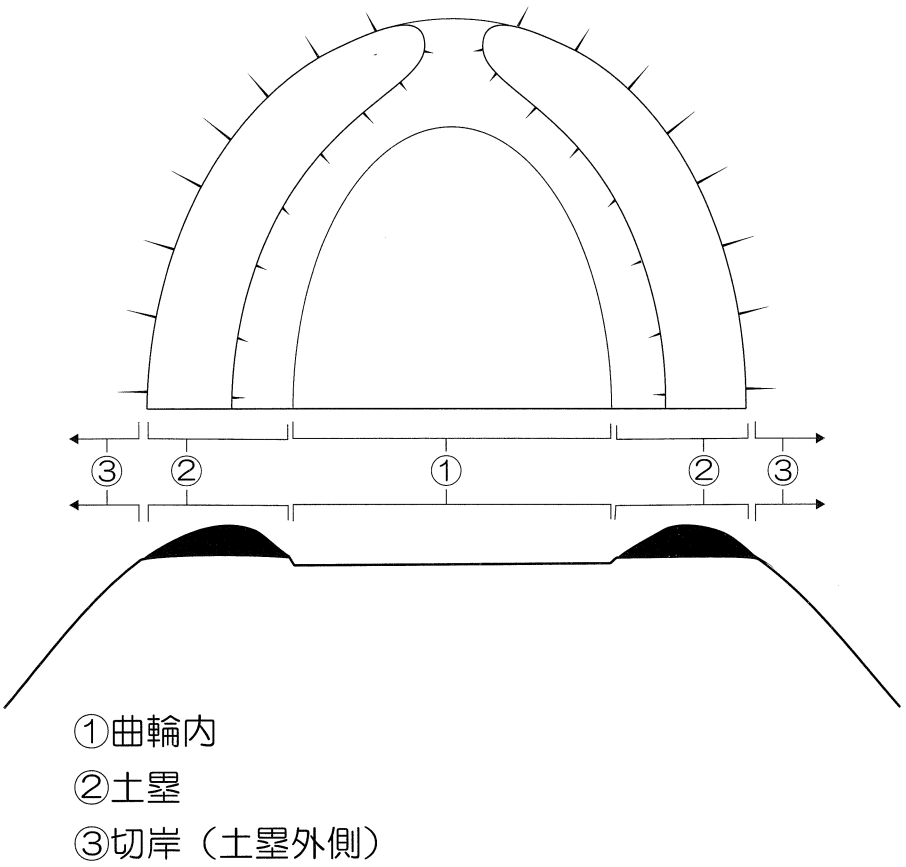
8．自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。

9．本書の執筆については高橋、掲載の遺物実測図は安川が作成し、写真撮影は高橋・安川が、編

集は山崎の補助を得て高橋が行った。

10. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は雲南市教育委員会で保管している。

11. 本書で用いた山城の部分名称は以下のとおりである。



山城の名称模式図

目　　次

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過…… 2

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境…… 5
第２節　歴史的環境…… 6

第３章　調査の方法と成果

第１節　高瀬山城跡周辺の過去の調査…… 10
第２節　調査の方法…… 10
第３節　第１次調査（弥生時代・中世）…… 11
第４節　第２次調査（古代・中世）…… 16

第４章　ＡＭＳ年代測定分析

第１節　出土炭化物の年代測定…… 26
第２節　年代測定の結果…… 27

第５章　総　括

第１節　雲南市高瀬山城の構造について…… 30
第２節　まとめ…… 44

付表

表　目　次

表１　高瀬山城跡周辺の遺跡一覧表…… 9
表２　小穴規模…… 22
表３　AMS 年代測定結果 …… 29
表４　雲南市内にある弥生前期の遺跡一覧…… 44

挿　図　目　次

第１図　工事計画図（1/1.500）…… 3
第２図　高瀬山城跡の位置図 …… 5
第３図　高瀬山城跡と周辺主要遺跡分図
（1/50.000）…… 8
第４図　A・B区の位置図（1/800）…… 12
第５図　A区土層断面図及び位置図
（1/50、1/500）…… 13
第６図　B区土層断面図及び位置図
（1/50、1/1000）…… 14
第７図　B－②６層出土遺物実測図（1/3）
…… 15
第８図　調査前地形測量図（1/150）…… 17
第９図　トレンチ配置図（1/150）…… 18
第10図　調査区土層断面図（1/50）…… 19～20
第11図　土塁平面図（1/150）…… 21
第12図　SK01・02、SX01、小穴Ｐ１～
26平面図（1/150）…… 23
第13図　SK01・02、小穴P25土層断面図
（1/20、1/30、1/50）…… 23
第14図　石列a～e、集石１・２平面図
（1/150）…… 24
第15図　石列a～e立面図及び集石１断面図
（1/50）…… 24
第16図　遺構外出土遺物実測図（1/3）…… 25
第17図　試料採取地点位置図 …… 27
第18図　歴年較正結果① …… 28
第19図　歴年較正結果② …… 29
第20図　高瀬山城縄張り図 …… 32
第21図　佐々布要害山城縄張り図 …… 33
第22図　多久和城縄張り図 …… 35
第23図　茶臼山城縄張り図 …… 36

図　版　目　次

図版１－１　B区－①調査前（北東から）
－２　B区－①土層断面（南西から）
図版２－１　B区－②の盛土（西から）
－２　B区－②遺物出土状況（東から）
図版３－１　A区－④完掘後（南東から）
－２　A区－②土層断面（北西から）
図版４－１　第２次調査区トレンチ状況(南から)
－２　第２次調査区完掘後（南から）
図版５－１　A－A′北側の土層断面（南東から）
－２　B－B′西側土塁の土層断面(南から)
図版６－１　石列d・e及び集石１(北西から)
－２　石列a全景（西から）
図版７－１　SK02調査前（北から）
－２　小穴P12～14（東から）
図版８－１　B区－②出土遺物
－２　第２次調査区遺構外出土遺物

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

現在、全国の消防無線は「アナログ方式」で運用している。しかし、大規模災害への備えや、救急活動件数の増加で、電波数が不足したため、消防庁は「デジタル方式」への移行を決めた。

これを受け、雲南消防本部も「デジタル方式」へ移行するため、基地局候補地を検討したところ、高瀬山の山頂が該当した。そこで、雲南広域連合から雲南市教育委員会へ、埋蔵文化財の有無の照会があった。

この山頂に存在する高瀬山城跡には、これまで「明確な遺構はない」とされてきたが、現地確認したところ、曲輪をほぼ全周する土塁や堀切を発見したので、県文化財課の職員と、山城の専門家である山根正明氏に、同行を依頼し、再度、現地踏査を行った。

その結果、残存状態がよく、歴史的価値の高い山城であるため、事業者に設計変更を求めることになった。その後、雲南消防本部との協議で、工事内容を一部変更し、城跡への影響を最小限にすることで帰結した。

工事内容の変更で、当初の予定より林道工事に時間を要することになったため、林道敷設地内の調査を「第１次調査」、基地局建設予定地の調査を「第２次調査」とし、林道地内の発掘調査を早急に行なった。なお、各調査の手続きは以下のとおりである。

【第１次調査】

雲南消防本部消防長は市教育委員会を経由し、島根県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘の通知」を提出（平成23年10月28日付、雲連消通第229号［進達：平成23年10月28日付、雲教社第926号］）。

島根県教育委員会から雲南消防本部へ発掘調査の実施を勧告（「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」平成23年11月28日付、島教文財第57号の66）。

雲南消防本部から発掘調査の依頼を受けた雲南市教育委員会は、島根県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出（平成23年10月28日付、雲教社第926号）。

【第２次調査】

雲南広域連合長は市教育委員会を経由し、島根県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘の通知」を提出（平成24年６月４日付、雲連消通第69号［進達：平成24年６月20日付、雲教社第926号］）。

島根県教育委員会から雲南広域連合へ発掘調査の実施を勧告（「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」平成24年６月27日付、島教文財第11号の13）。

雲南広域連合から発掘調査の依頼を受けた雲南市教育委員会は、島根県教育委員会教育長に「埋蔵文化財発掘調査の通知」を提出（平成24年７月４日付、雲教文第124号）。

第２節　発掘調査の経過

【第１次調査】

調査対象地は林道敷設範囲で、調査開始日は平成23年12月７日である。調査地の地形は急峻な斜面であり、現地踏査時にも遺構・遺物は確認できなかった。そのため、当該地に山城以外の遺跡が存在する可能性は、極めて低いと判断した。

そのため、山城の専門家である山根正明氏に指示を仰ぎながら、堀のような落ち込みが存在する、２つの地点を調査地として設定した。調査地は、基地局建設用予定地に近い調査地をＡ区、東西にある曲輪のほぼ中間地点に位置する調査地をＢ区とした。

Ａ区は、主郭のある山頂から西に延びる尾根の基部に位置する。基部の南北斜面には、堀切状の落ち込みがあった。そこで、断面形状の確認（A－①・②・④）と、埋没した堀切の有無の確認（A－③）を行った。

A－①の地山断面は、上部がひらく「U」字状を呈する。A－②は中央部に向けて、緩やかに傾斜し、A－④の地山断面は中央部が１段下がる「凹」形であった。なお、A－③は地山が平坦であったため、埋没した堀切は存在しないと判断した。いずれの箇所からも遺物は出土していない。

Ｂ区は、東西にある曲輪のほぼ中間地点に位置する。この地点には、西から、尾根筋を分断する堀切の裾部、土塁状の高まり、竪掘状の落ち込みがあった。そのため、B－①では、堀切の断面形状と、土塁状の高まりが人為的なものかを確認した。B－②では、竪堀の存在を確認する調査を行った。

調査の結果、B－①の堀切は薬研堀、土塁状の高まりは人為的に築造されたものであることが判明した。B－②から竪堀などの遺構はなかったが、弥生時代前期の土器を含む計８点の土器が出土した。

【第２次調査】

調査対象地はデジタル無線基地局建設予定地で、調査面積は約150m^2。調査開始日は平成24年７月19日である。

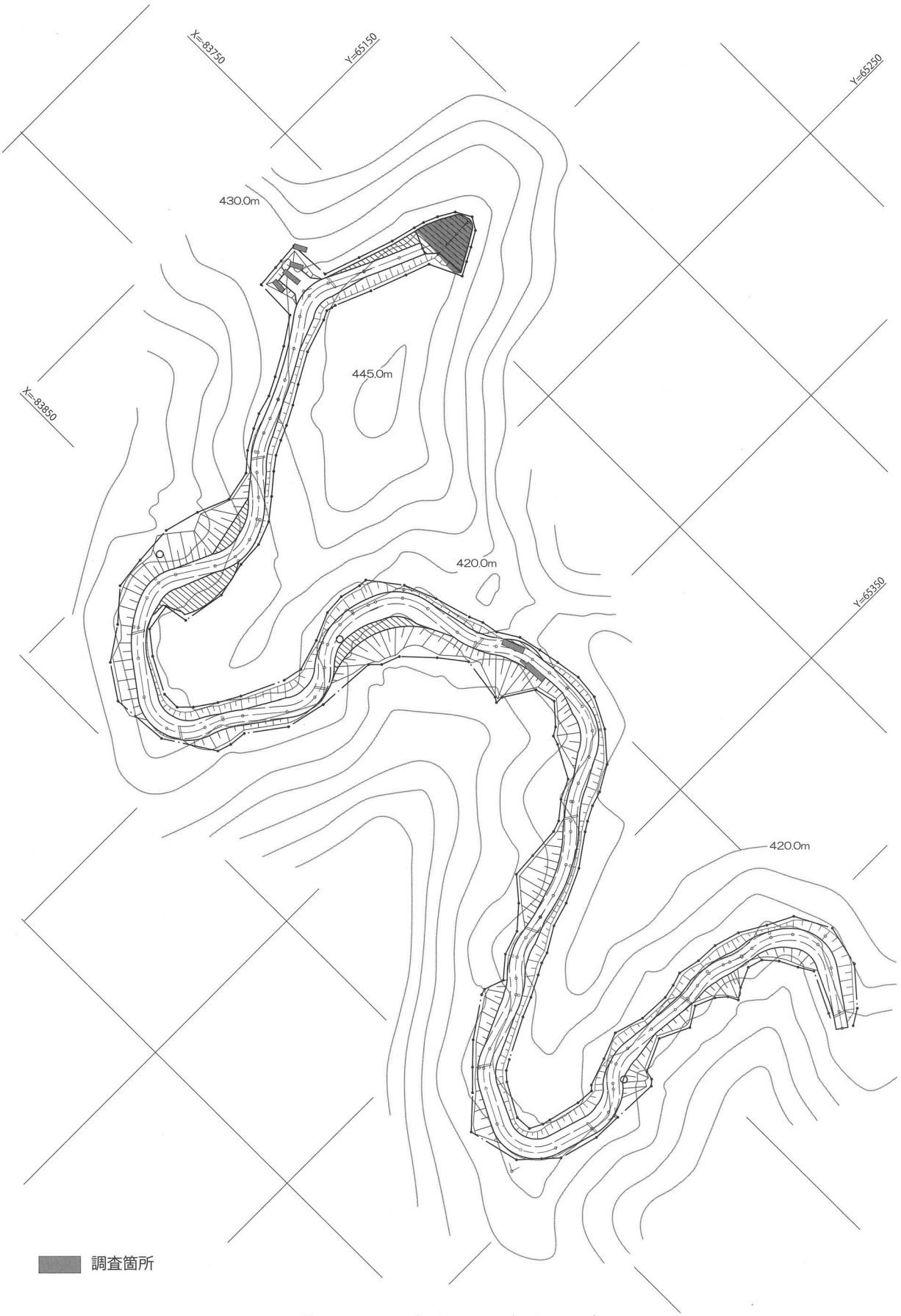
調査地は、主郭の北側に位置する曲輪で、土塁の残存状態も良好であった。そのため、①土塁の堆積状況の確認、②曲輪内の遺構の確認、③切岸部の遺構の確認、などの点に留意して調査を行った。

まず、層序を確認するため調査地内を試掘し、曲輪内は２層、土塁は３層に大別した。その後、表土掘削を行い、整地土上面で柵列や建物跡を探したが、発見には至らなかった。

その後、層位に従い土塁や曲輪内の調査を行っていたところ、９月27日に雲南消防から、調査地の西側の一部だけ、先に調査を終えてほしいとの依頼があった。そこで、島根県文化財課と協議を行った結果、西側の調査を先行させることにした。

そのため、南北セクションを境に、調査区を区分けし、西側の調査区は10月12日に、残る全域の調査は11月２日に完了した。

調査の結果、土層断面で、盛土の堆積状況を確認した。また、土塁の上面に１列、曲輪内の土塁裾部に１列、土塁の盛土内に３列の石列があった。いずれも残存長は２m前後である。



第１図　工事計画図（1/1.500）

曲輪内では、ともに多量の炭を包含するSK01・02と、性格不明のSX01を確認した。その他に、南側に集中する小穴群（P１～21）と、土塁の曲線に沿うように掘られた小穴群（P22～26）が見つかっている。ちなみに、P25以外は地山面で発見した。

P１～21の小穴群は、南北筋と東西筋、北東南西筋の３方向の並びが存在した。また、P１～３・13・14・21の６穴は、地山の岩盤に穴をあけている。

P22～26の小穴群は、全部で６穴。P25だけ土塁の盛土の４層上面で確認した。土塁との位置関係は、P22～24が土塁の内側斜面、P26が土塁の外側斜面、P25が土塁の中心部である。

切岸部も表土掘削を行った後、遺構の有無を確認したが、発見できなかった。

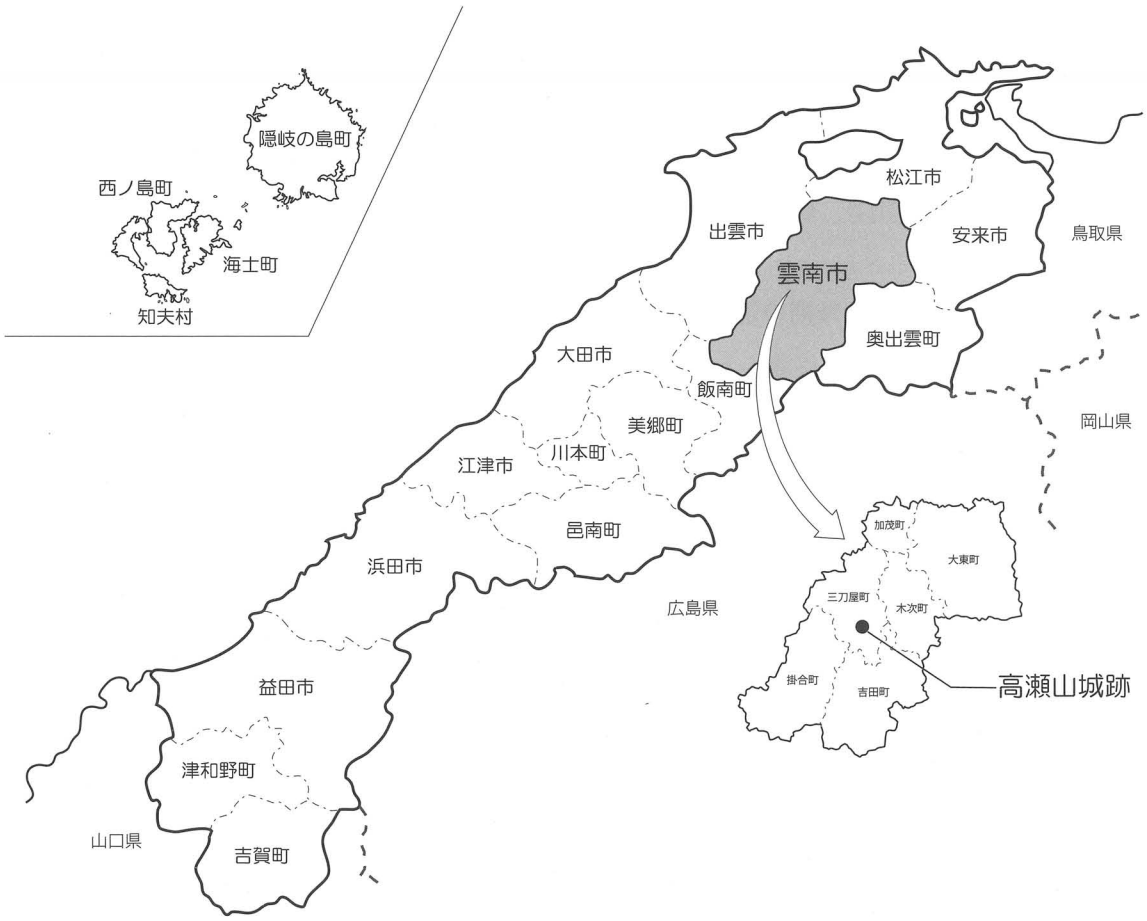
第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

高瀬山城跡は、島根県雲南市三刀屋町多久和地内に立地する。この山は、標高約445m で、山頂中心部には二等三角点の石杭が打ち込まれている。山裾の西側には飯石川、東側には斐伊川が流れており、山頂からは、大万木山（標高1.218m）といった中国山地の山々が望める。

この山城へは、県道176号大東掛合線から入る林道を抜けて向かう。林道の入り口から山頂までは約3.1km である。

雲南市は、旧大原郡の大東町・加茂町・木次町と、旧飯石郡の三刀屋町・掛合町・吉田村の６町村が、平成16年11月１日に合併して誕生した。出雲地方の中央部に位置し、北側では松江市や出雲市、南側では奥出雲町や広島県庄原市などと隣接する。



第２図　高瀬山城跡の位置図

第２節　歴史的環境

【縄文時代】

本調査では、当該期の遺構・遺物は見つかっていない。

高瀬山の北、約２kmには、宮田遺跡（Ｒ９）、森谷川遺跡（R40）、京殿遺跡（R50）、飯石小学校グランド遺跡（R201）が存在する。これらの遺跡は、飯石川沿いの河岸段丘に位置し、宮田遺跡から飯石小学校グランド遺跡までの直線距離は、400m程度である。

本遺跡の西側には、馬場遺跡（R247）、熊谷遺跡（Ｒ９・Q17）、六重下遺跡（R260）、鉄穴内遺跡（R256）などがある。これらの遺跡は、中国横断自動車道松江尾道線の建設に伴い発掘調査した結果、前期から後期の遺物が出土した。

【弥生時代】

今回の調査で、前期の土器片が出土している。

高瀬山から半径１km以内には、前期末の土器片２点が出土した六重下遺跡しかなく、半径５km前後でも、前期末の溝が発見された要害遺跡（R248）だけである。ちなみに、本遺跡と六重下遺跡の比高差は約200mを測る。

雲南市内にある前期の遺跡には、家の後Ⅰ遺跡（Q52）、家の後Ⅱ遺跡（Q111）、垣ノ内遺跡（Q53）、川平Ⅰ遺跡（Q56）、宮ノ脇遺跡（Q71）、北原本郷遺跡（Q110）などがある。

高瀬山城跡周辺に位置する中・後期の遺跡には、宮田遺跡、清水ヶ平遺跡（Ｑ９）、早稲田遺跡（Q27）、北原Ⅰ遺跡（Q59）、桜林遺跡（Q39）などがある。

その中でも、桜林遺跡のある木次町寺領周辺には、欠戸遺跡、元日登中学校造成地遺跡（Q99）、伝木次銅鐸出土地（Q103）、原口墳墓群（Ｑ２）、日登本郷丘陵墳墓群（Q149）などの遺跡が集中している。

雲南市を代表する、中・後期の遺跡は、郡垣遺跡（O43）、加茂岩倉遺跡（P115）、神原正面遺跡（P24）である。

郡垣遺跡は、「官衙遺跡」として有名だが、数百点にもおよぶ弥生土器が出土した遺跡でもある。出土土器の大多数は弥生中期。遺構は、地山面に掘られた竪穴建物１棟だけである。

加茂岩倉遺跡は、39個の銅鐸が出土した埋納遺跡である。銅鐸は、鰭を立て、大きな銅鐸の中に小さな銅鐸を入れる「入れ子」の状態で出土した。銅鐸の特徴だが、小さな銅鐸は、高さが31cm前後で、全て外縁付鈕１式。大きな銅鐸は、高さが45cm前後で、外縁付鈕２式から扁平鈕Ⅲ－２～突線鈕Ⅳ－１式と時期幅がある。

神原正面遺跡は、弥生時代中期から古墳時代までの墓が、尾根筋に連綿と築造された遺跡である。本遺跡は、北遺跡群と南遺跡群に分けられており、両遺跡群で発見された、マウンドをもつ墓の総数は、30基をこえる。

運動公園の建設に伴って実施された発掘調査により、神原正面北遺跡群のＢ・Ｅ区は中期から、Ａ・Ｃ区は後期から墳墓が築造され始めたことが判明した。

【古墳時代】

本調査では、この時期の遺物・遺構は見つかっていない。

高瀬山城跡の北、約2kmには、森谷横穴群（R14）、古殿古墳（R16）、古殿今宮古墳（R17）の古墳がある。これらの古墳は、宮田遺跡や森谷川遺跡などと、同じ河岸段丘に位置する。

飯石川に沿って、下流に下ると、大倉口横穴群（R13）、大年横穴群（R11）、粟谷横穴群（R７）、粟谷谷横穴（R12）などが点在する。

雲南市の特徴は、松江市・安来市に次いで、前期古墳から出土した鏡の点数が多いことである。この古墳としては、神原神社古墳（P３）、松本１号墳（R２）、斐伊中山２号墳（Q48）、土井・砂１号墳（P69）、熊谷２号墳（Q17）がある。

【古代】

今回の調査では、大量の炭を包含する土坑を土塁直下で発見した。土坑内の炭化物を、放射性炭素年代測定法で測定したところ、８世紀後半との結果がえられた。

高瀬山から半径2km前後には、須恵器が出土している宮田遺跡、８世紀中頃から９世紀前半にかけての製鉄関連遺構が発見された鉄穴内遺跡、飯石神社の南に隣接し７世紀後半以降の須恵器の高台付長頸壺１点が出土した飯石神社上遺跡（R41）、奈良時代後半の須恵器の蓋杯が出土した六重城南遺跡（R255）などの遺跡がある。

市内に存在する代表的な遺跡は、733年に編纂された『出雲国風土記』に記された「旧大原郡家」の建物跡を確認した郡垣遺跡や、斐伊の新造院に関係すると伝えられる巨石が発見された斐伊郷新造院跡（R７）などがある。

また、『出雲国風土記』「飯石郡」の「飯石小川」の箇所に「佐久禮山」とあるが、現在、この山は高瀬山に該当すると考えられている。

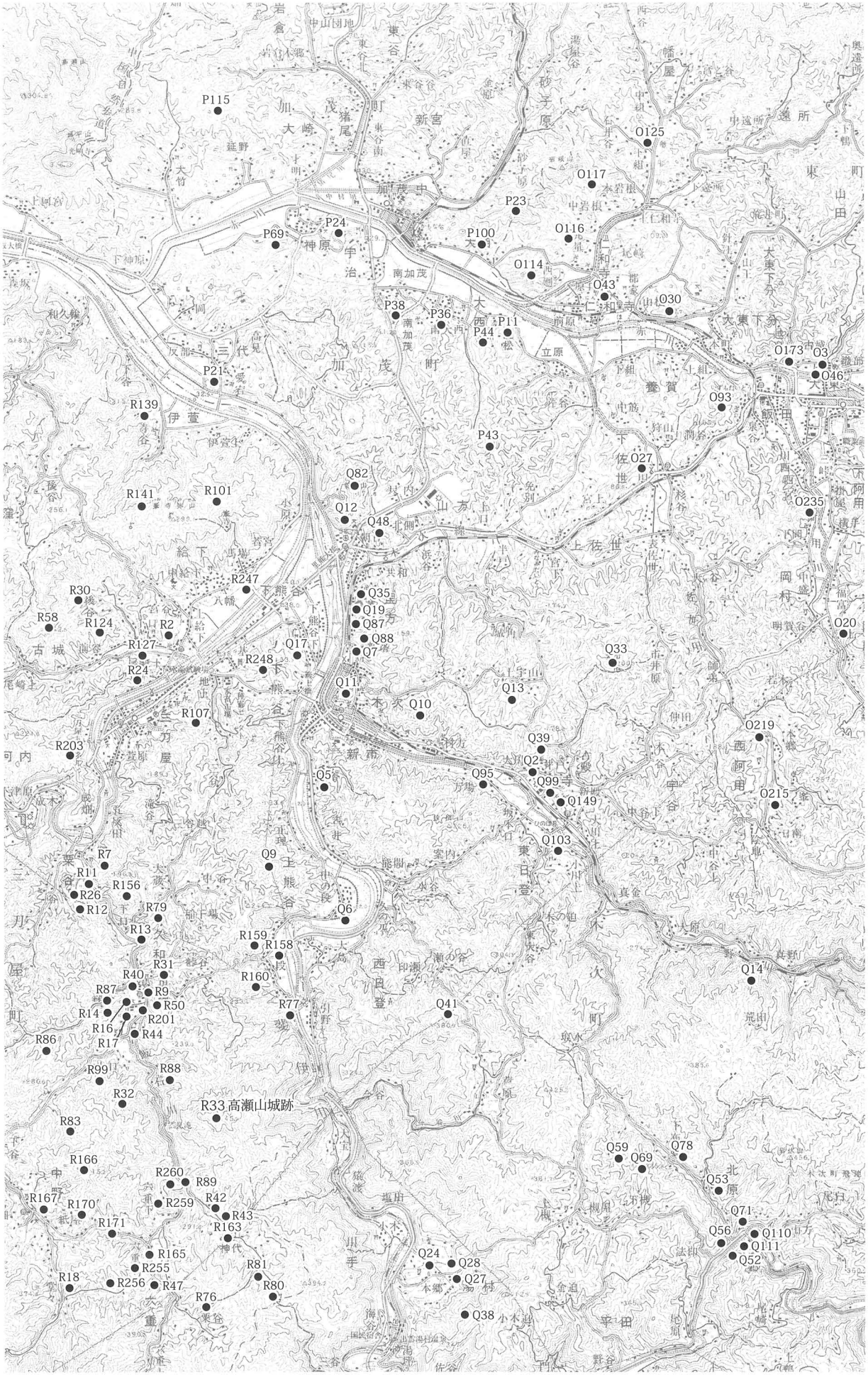
【中世】

高瀬山城跡の周囲2km内には、上熊谷秋葉山城跡（R159）、上熊谷蛇山城跡（R160）、神代城跡（R163）、六重城跡（R165）、トチノ木上城跡（R170）、福谷城跡（R32）、多久和城跡（R31）といった山城が存在する。

高瀬山城跡の戦況を記した、当該期の文献は皆無だが、『陰徳太平記』『雲陽軍実記』といった軍記物や、尼子再興戦時の多久和城跡の様子を記した「小早川隆景書状」などから、高瀬山周辺の戦況について窺い知ることができる。

また、市内各地で、この頃から近世にかけての製鉄遺跡が急増する。高瀬山城跡の半径2km前後にも、岩広製鉄遺跡（R158）、後の谷鈩跡（R77）、しょうぶ鈩跡（R80）、神庭鈩跡（R80）、粟谷鈩跡（R76）、六重大鍛冶屋鈩跡（R89）、六重峠鈩跡（R171）、中野杉谷の鈩跡群（R83）、樋ノ谷鈩跡（R86）、小原鈩跡（R88）、湯舟鈩跡（R99）、森谷鈩跡（R87）、道の下鈩跡（R79）などが点在する。

ただ、製鉄遺跡の大半は、未調査のため時期が確定していない。



第３図　高瀬山城跡と周辺主要遺跡分布図（1/50.000）

第１表　高瀬山城跡周辺の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名称	種別	所在地
雲南市大東町			
O３	大東高校グランド遺跡	集落跡	大東　輪之内
O20	叶坂古墳	古墳	東阿用　便坂
O27	佐世城跡	城跡	下佐世
O30	岩熊城跡	城跡	養賀　岩熊
O43	郡垣遺跡	郡衙跡・散布地	仁和寺　郡家
O44	横枕遺跡	散布地	新庄　横枕
O46	輪の内遺跡	集落跡	大東　輪之内
O93	奥明城跡	城跡	飯田　奥明
O114	高塚古墳群	古墳	仁和寺　高塚他
O116	法雲寺城跡	城跡	仁和寺　法雲寺
O117	妙見寺砦跡	城跡	仁和寺　宮ノ谷
O125	岡田上城跡	城跡	幡屋　岡田
O173	古城砦跡	城跡	大東　古城
O215	日南城跡	城跡	西阿用　西光寺他
O219	城戸城跡	城跡	西阿用　城戸
O235	駒谷城跡	城跡	下阿用　駒谷他
雲南市加茂町			
P３	神原神社古墳	古墳	神原
P11	近松城跡	城跡	近松
P21	三代古墳	古墳	三代　矢の尻
P23	高麻城跡	城跡	大西
P24	神原正面遺跡	墳丘墓群・古墳	神原　正面
P36	会下居館跡	館跡	南加茂　会下
P38	三本松古墳群	古墳	南加茂
P43	八ツ畦古戦場跡	古戦場	近松　八ツウ子
P44	宮山城跡	城跡	近松　宮山
P69	土井・砂遺跡	古墳・横穴墓	神原
P100	小門谷城跡	城跡	大西　小門
P115	加茂岩倉遺跡	銅鐸埋納地	岩倉
雲南市木次町			
Q２	原口墳墓群	墳墓	寺領　原口
Q５	下吉井横穴群	横穴	西日登　下吉井
Q６	岩佐古墳	古墳	上熊谷
Q７	斐伊郷新造院跡	寺院跡	里方　塔村
Q９	清水ヶ平遺跡	古墳	
Q10	霞龍山城跡	城跡	木次
Q11	秋葉山城跡	城跡	木次
Q12	城名樋山城跡	城跡	里方
Q13	宇山城跡	城跡	寺領　宇山
Q14	王守山城跡	城跡	寺領　真野
Q17	熊谷遺跡	軍団跡	下熊谷　その他
Q19	明徳寺横穴群	横穴	里方　明徳寺
Q27	早稲田遺跡	散布地	湯村
Q33	伝室山寺跡	寺院跡	宇谷　寺床
Q35	斐伊新造院（尼）跡	寺院跡	里方　法花坊
Q41	固屋畦城跡	城跡	西日登　印瀬
Q48	斐伊中山古墳群	古墳	里方
Q52	家の後Ⅰ遺跡	散布地	北原
Q53	垣ノ内遺跡	散布地	尾白
Q56	川平Ⅰ遺跡	集落跡	平田
Q59	北原Ⅰ遺跡	散布地	北原
Q69	下布施横穴墓群	横穴	北原
Q71	宮ノ脇遺跡	建物跡	北原
Q78	寺田Ⅰ遺跡	製鉄遺跡他	北原
Q82	妙見山遺跡	祭祀遺跡他	里方
Q87	小南古墳	古墳	里方　原
Q88	塔の村団地横穴墓	横穴	里方　塔の村
Q95	万場Ⅰ遺跡	散布地	東日登　万場
Q96	欠戸遺跡	散布地	寺領　大川下
Q99	元日登中学校造成地遺跡	散布地	寺領　大川上
Q103	伝木次銅鐸出土地	祭祀遺跡	東日登　小川上
Q110	北原本郷遺跡	散布地	北原　本郷
Q111	家の後Ⅱ遺跡	散布地	北原　本郷
Q149	日登本郷丘陵墳墓群	墳墓群	東日登　本郷
雲南市三刀屋町			
R２	松本古墳群	古墳	給下　上給下
R７	粟谷横穴群	横穴	粟谷
R９	宮田遺跡	集落跡	多久和　宮田
R11	大年横穴群	横穴	粟谷　大年
R12	粟谷谷横穴	横穴	粟谷　谷
R13	大倉口横穴群	横穴	多久和　大倉口
R14	森谷横穴群	横穴	多久和　森谷
R16	古殿古墳	古墳	多久和　古殿
R17	古殿若宮古墳	古墳	多久和
R18	堂々横穴	横穴	中野　堂々
R24	三刀屋城跡	城跡	古城　尾崎
R26	粟谷城跡	城跡	粟谷
R30	元屋敷城跡	城跡	古城　後谷
R31	多久和城跡	城跡	多久和
R32	福谷城跡	城跡	多久和　福谷
R33	高瀬山城跡	城跡	多久和　小原谷
R40	森谷川遺跡	散布地	多久和　森谷
R41	飯石神社穴内遺跡	散布地	多久和
R42	神代横穴	横穴	神代　砂子田
R43	神代川原遺跡	散布地	神代
R47	六重飯石神社境内横穴	横穴	六重　郷戸
R50	京殿遺跡	散布地	多久和　京殿
R58	三刀屋じゃ山城跡	城跡	古城大谷
R76	粟谷鈩跡	製鉄遺跡	六重　六重中粟谷
R77	後の谷鈩跡	製鉄遺跡	上熊谷
R79	道の下鈩跡	製鉄遺跡	多久和　道の下
R80	しょうぶ鈩跡	製鉄遺跡	神代　しょうぶ
R81	神庭鈩跡	製鉄遺跡	神代　神庭
R83	中野杉谷の鈩跡群	製鉄遺跡	中野　東下谷杉谷
R86	樋ノ谷鈩跡	製鉄遺跡	多久和　樋ノ谷
R87	森谷鈩跡	製鉄遺跡	多久和　森谷
R88	小原鈩跡	製鉄遺跡	多久和　小原
R89	六重大鍛冶屋鈩跡	製鉄遺跡	六重　六重下
R99	湯舟鈩跡	製鉄遺跡	多久和　湯舟
R101	峰寺山城砦跡群	砦跡	給下　蛇谷
R107	三谷城砦跡群	砦跡	三刀屋
R124	中山城跡	城跡	古城
R127	伝蔵前館	館跡	古城
R139	堀ノ内城跡	城跡	伊萱
R156	梅坊城跡	城跡	多久和　梅坊
R158	岩広製鉄遺跡	製鉄遺跡	上熊谷　岩広
R159	上熊谷秋葉山城跡	城跡	上熊谷　中村奥
R160	上熊谷蛇山城跡	城跡	上熊谷　蛇山
R163	神代城跡	城跡	神代　尚免
R165	六重城跡	城跡	六重　蛇谷
R166	中野鳥屋ヶ丸城跡	城跡	中野
R167	正蔵坊横穴	横穴	中野　紙屋
R170	トチノ木上城跡	城跡	中野　紙屋
R171	六重峠鈩跡	城跡	中野　紙屋
R201	飯石小学校グランド遺跡	散布地	多久和
R203	大櫃山城跡	城跡	殿河内　大櫃
R247	馬場遺跡	集落跡	給下
R248	要害遺跡	集落跡	下熊谷
R255	六重城南遺跡	古墳	六重
R256	鉄穴内遺跡	製鉄遺跡	六重
R259	瀧坂遺跡	製鉄遺跡	六重
R260	六重下遺跡	散布地	六重下

第３章　調査の方法と成果

第１節　高瀬山城跡周辺の過去の調査

高瀬山城跡周辺で行われた、過去の調査は下記のとおりである。

昭和48年度調査（分布調査）

昭和48年の分布調査の際、山頂部で長軸35m、短軸15m の平坦面を確認した。この長軸の長さは、今回の調査で確認した、主郭と第２次調査地点（デジタル無線基地局建設予定地内）の長軸と、ほぼ合致する。ただ、昭和48年度の調査記録書には、平坦面の規模しか記されていない。

昭和63年度調査（分布調査）

三刀屋町教育委員会が、昭和63年度国庫及び県費の補助を受けて行った、遺跡詳細分布調査の報告書には、「山頂の物見郭か　削平面　15×35m　単郭」と記されている。

島根県中近世城館跡分布調査（分布調査）

島根県が、国庫補助金の交付を受けて、平成５年度から平成９年度までの５カ年計画で実施した、県内近世城館跡分布調査の報告書には、「郭？」「明確な遺構無し」との記載がある。

第２節　調査の方法

本調査は、表土掘削から人力のみで掘削した。なお、第２次調査は、当初、南北Ａ－Ａ′と、東西Ｂ－Ｂ′にトレンチを設定する予定だったが、草刈り後、曲輪の南側で基壇状の高まりを確認したため、急遽、Ｃ－Ｃ′を追加した。なお、調査の結果、この高まりは、南側の地山が北側より、高く平坦であったため、基壇状に見えただけであった。

遺物の取り上げ方だが、第１次調査は調査区ごとに、第２次調査は南北のＡ－Ａ′トレンチと、東西のＢ－Ｂ′トレンチで、調査区を４分割して取上げた。

事前調査で確認した、堀切や土塁の調査方法であるが、堀切は、①断面形態、②埋土の堆積状況。土塁は、①盛土の堆積状況、②地山の掘削状況の解明に主眼をおいた。また、曲輪内の調査では、柱穴などの有無にも注意を払った。確認した遺構は半裁で堆積状況を確認した。

写真撮影に用いた機材は、120mm（６×７）ブローニー判のモノクローム・リバーサルと、600万画素及び800万画素のデジタルカメラを使用した。

整理段階で、弥生土器と陶磁器は、専門家に意見を求めた。弥生土器は、調査時の見解どおり、時期は前期で数個体が存在するとのことだった。陶磁器は15～16世紀初頭との見解であった。

第３節　第１次調査（弥生時代・中世）

第１次調査のＡ・Ｂ区は、縄張り調査時に、堀状の落ち込みを確認した地点である。以下、区ごとに詳細を記す。

（１）Ａ区の遺構と遺物（第４・５図、図版３）

Ａ－①は、尾根の基部の北側斜面に設定した。埋土は３層で、１層は暗褐色粘性土、２層は黄褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土である。１層は表土、２・３層は自然堆積。出土遺物はない。地山の断面は、上部がひらく「U」字状である。

Ａ－②も、尾根の基部の北側斜面に設定した。埋土は３層で、１層は暗褐色粘性土、２層は黄褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土。１層は表土、２・３層は自然堆積である。遺物は出土していない。地山の断面は、緩やかな「V」字形である。

Ａ－③は、尾根に沿って設定した。埋土は５層。１層は暗褐色粘性土、２・３層は黄褐色砂質土、４層は黒色粘性土、５層は暗褐色粘性土。１層は表土、２・３層は自然堆積。４・５層は火炊き行為を行った土坑の埋土である。この土抗は、時期的に新しいと判断されたため、詳細な調査は行っていない。地山の断面は、ほぼ平坦である。なお遺物は出土していない。

Ａ－④は、尾根の基部の南側に設定した。埋土は３層で、１層が暗褐色粘性土、２層が黄褐色砂質土、３層が明黄褐色砂質土である。１層は表土、２・３層は自然堆積。出土遺物はない。地山の断面は、中央部が１段下がる「凹」形である。

（２）Ｂ区の遺構と遺物（第４・６・７図、図版１・２）

Ｂ－①は、尾根筋を分断する堀切の南端に設定した。埋土は７層。１層が黒褐色粘性土、２層がにぶい黄橙色砂質土、３層が浅黄橙色砂質土、４層が明黄褐色砂質土、５層が暗褐色砂質土、６・７層が明褐色砂質土。出土遺物はない。

土層断面で確認した、２・３層が堆積する落ち込みは、尾根筋を分断する堀切が北側に隣接し、かつ、断面形が「V」字状であったため、薬研堀の断面と判断した。よって、１層は表土、２・３層は堀切の埋土、４～７層は堀を構築する際の盛土と思われる。

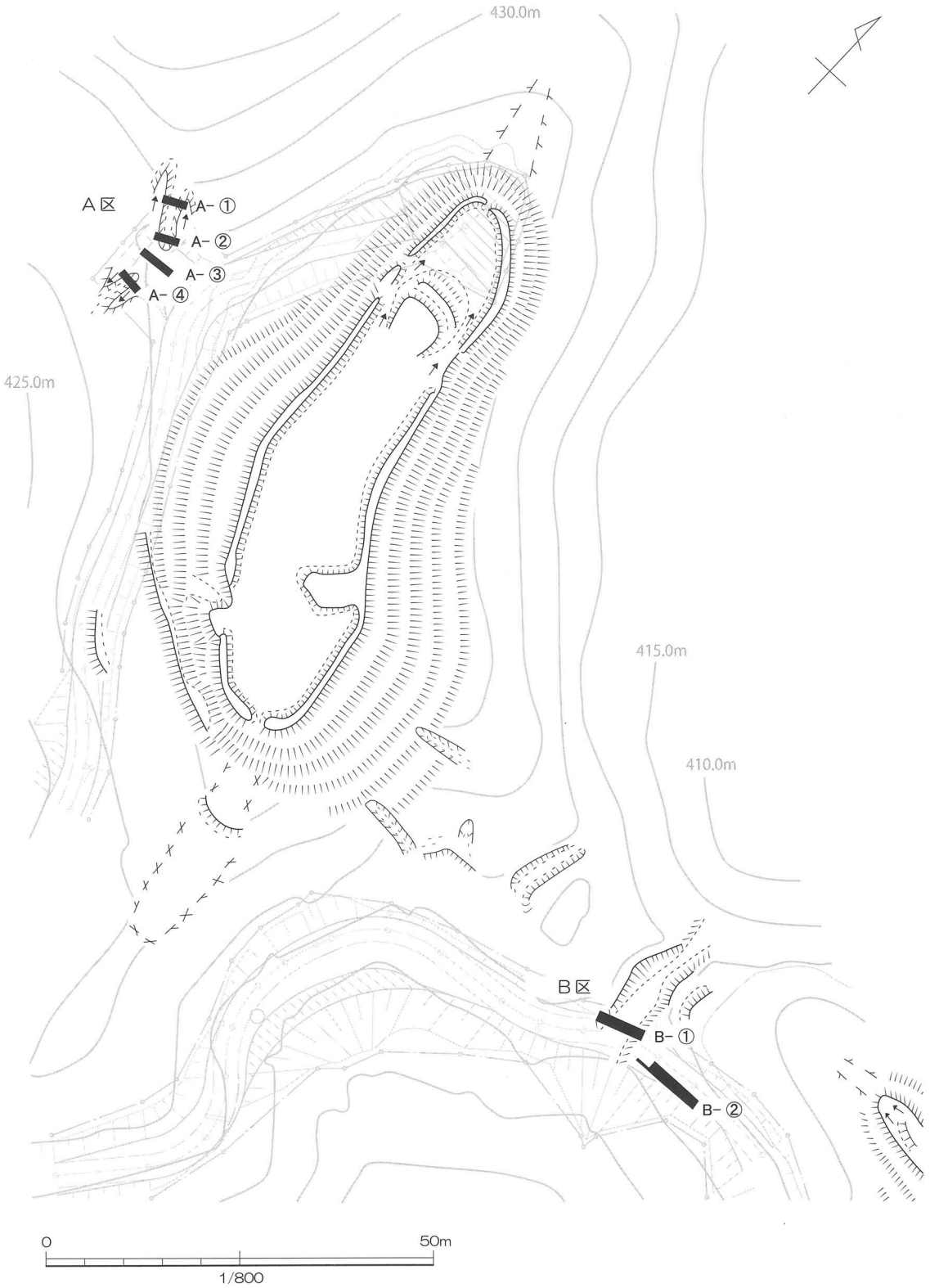
Ｂ－②は、竪堀状の落ち込みを確認した地点に設定した。埋土は７層で、１層が黒褐色粘性土、２・３層が黄褐色砂質土、４層が暗褐色砂質、５層が褐色砂質土、６層が暗褐色砂質土である。遺物は６層から出土した。

縄張り調査時に、Ac 地点と Ad 地点の間で確認した堀状の落ち込みは、人為的に掘削した痕跡がないことより、自然地形と判断した。よって、１層は表土、２～４層は堀を構築する際の盛土、５・６層は地山直上の堆積土である。

遺物は、Ｂ－②の６層から出土した。１・２は口縁部、３～８は体部である。程度に違いはあるが、いずれも風化している。

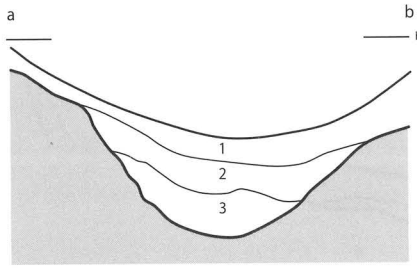
１は、甕の口縁部で、口縁端面に刻目文を施す。色調は、にぶい黄橙色（Hue10YR7/4）である。時期は弥生時代前期。

２も口縁部である。１の口縁の屈曲に比べ、鋭角的な屈曲である。色調は、にぶい黄橙色（Hue



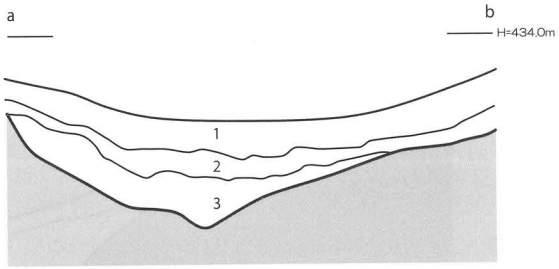
第4図　A・B区の位置図（1/800）

A-①



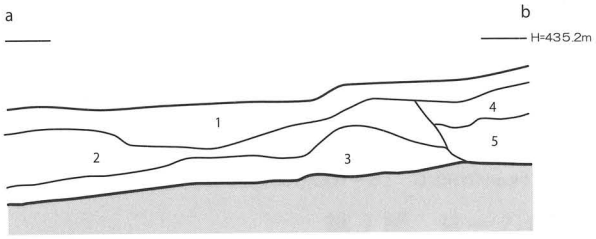
1　暗褐色粘性土　　Hue10YR3/3　表土
2　黄褐色土砂質土　Hue10YR5/6
3　明黄褐色砂質土　Hue10YR6/8（1～5cm大の地山ブロックを少量含む）

A-②



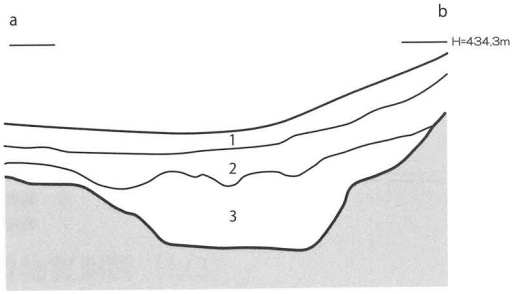
1　暗褐色粘性土　　Hue10YR3/3　表土
2　黄褐色土砂質土　Hue10YR5/6
3　明黄褐色砂質土　Hue10YR6/8（1～5cm大の地山ブロックを少量含む）

A-③

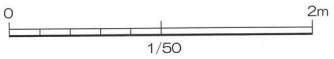


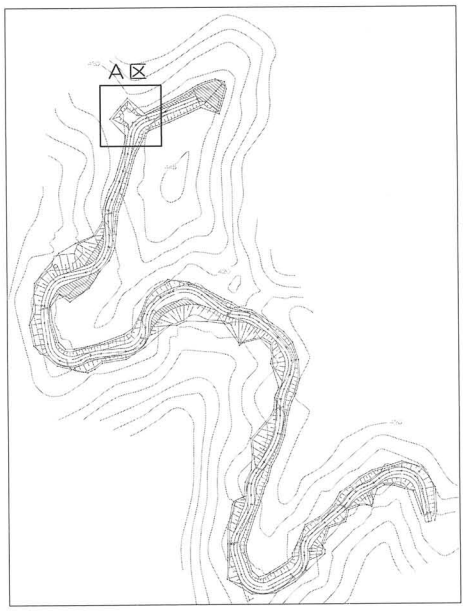
1　暗褐色粘性土　　Hue10YR3/3　表土
2　黄褐色砂質土　　Hue10YR5/6
3　黄褐色砂質土　　Hue10YR5/6
4　黒色粘性土　　Hue10YR1.7/1
5　暗褐色粘性土　　Hue10YR3/4

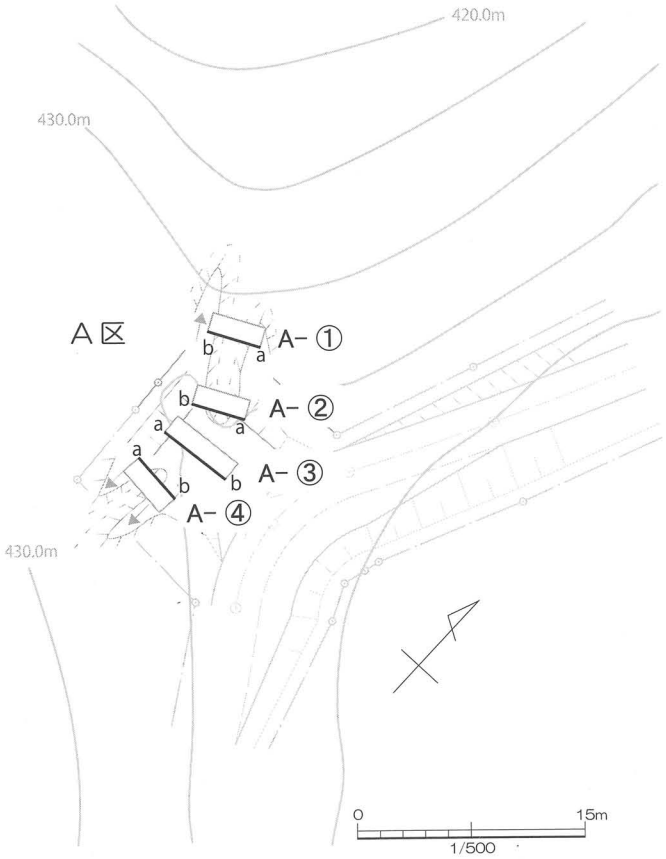
A-④



1　暗褐色粘性土　　Hue10YR3/3　表土
2　黄褐色砂質土　　Hue10YR5/6
3　明黄褐色砂質土　Hue10YR6/8

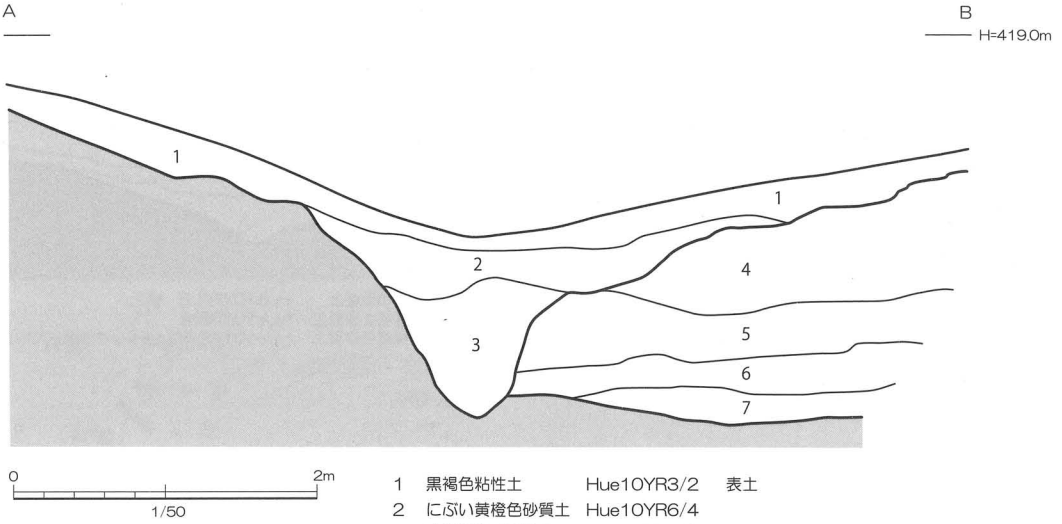




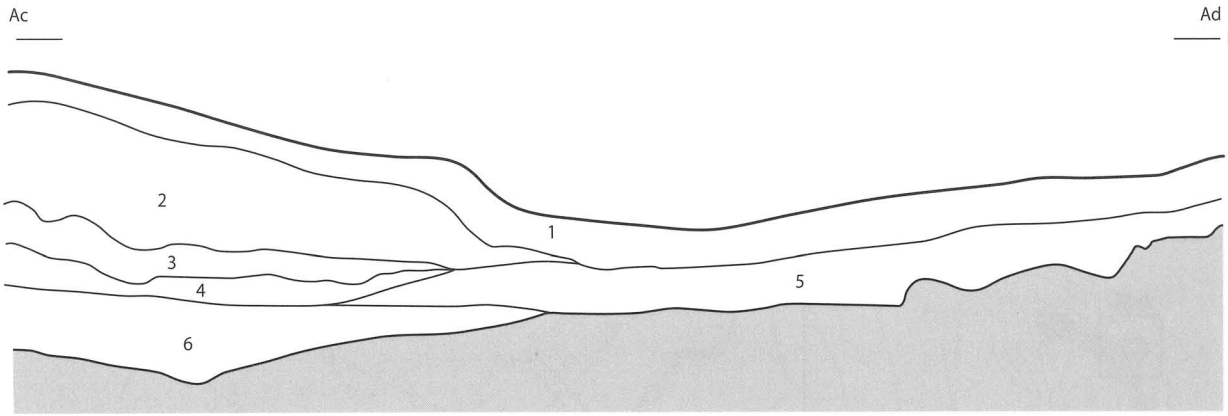


第5図　A区土層断面図及び位置図（1/50、1/500）

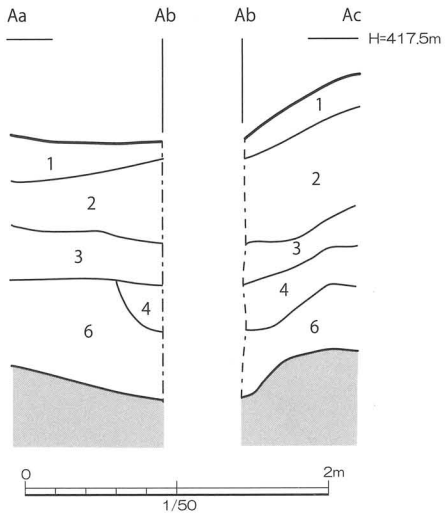
Bトレンチ

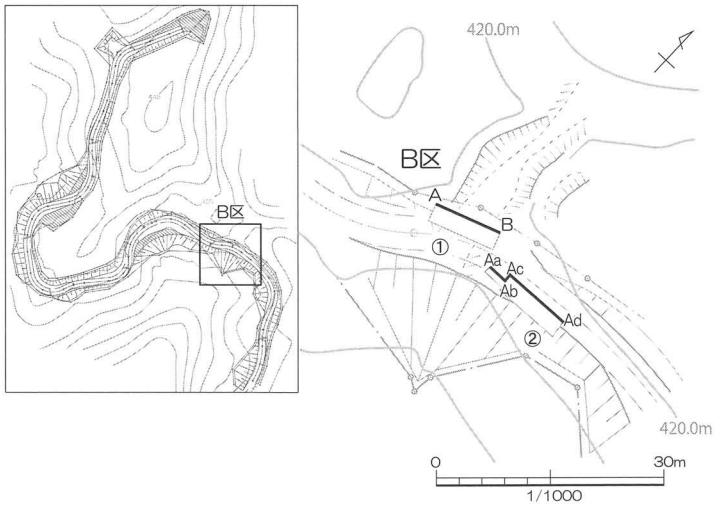


1	黒褐色粘性土	Hue10YR3/2	表土
2	にぶい黄橙色砂質土	Hue10YR6/4	
3	浅黄橙色砂質土	Hue2.5YR7/4	
4	明黄褐色砂質土	Hue7.5YR5/6	（1～3cm大の地山ブロックを極少量含む）
5	暗褐色砂質土	Hue10YR3/4	（旧表土）
6	明褐色砂質土	Hue10YR5/8	（5～10cm大の地山ブロックを少量含む）
7	明褐色砂質土	Hue10YR5/6	（5～10cm大の地山ブロックを多量に含む）

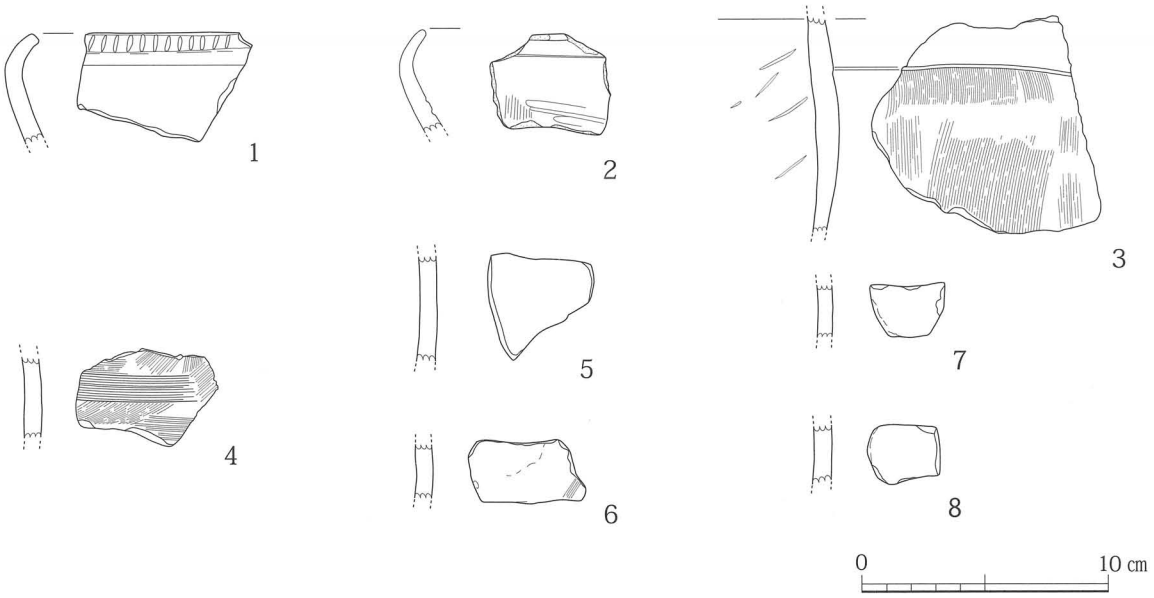


1	黒褐色粘性土	Hue10YR3/2	表土
2	黄褐色砂質土	Hue10YR5/6	（1～3cm大の地山ブロックを少量含む）
3	黄褐色砂質土	Hue10YR5/6	（3～15cm大の地山ブロックを多量に含む）
4	暗褐色砂質土	Hue10YR3/3	（旧表土）
5	褐色砂質土	Hue10YR4/4	
6	暗褐色砂質土	Hue10YR3/3	遺物包含層





第6図　B区土層断面図及び位置図（1/50、1/500）



第７図　B－②６層出土遺物実測図（1/3）

10YR6/4）。

３は体部。段をもうけた後、縦方向のハケを密に施している。色調は、にぶい黄橙色（Hue10YR 6/4）。時期は弥生時代前期。

４も体部で、外面はハケ調整。色調は、外面が黒色（Hue2.5YR2/1）、内面が橙色（Hue7.5YR6/4）。

５～８は体部の小片。５・６の色調は橙色（Hue7.5YR6/4）。７・８の色調は、にぶい黄橙色（Hue 10YR7/4）である。

第４節　第２次調査（古代・中世）

調査地は、主郭の北側に位置する曲輪である。標高は約439m をはかり、南から北へ緩やかに傾斜する。東西セクションＢ－Ｂ′とＣ－Ｃ′の堆積土は５層。１層が表土、２層が曲輪内の整地土、３層と４層が土塁の盛土、５層が地山整地土である。

南北セクションＡ－Ａ′の堆積土は７層。１層が表土、２層が曲輪内の整地土、３～６層が土塁の盛土、７層が地山整地土である。南北ラインの盛土の色調は、３・５層が褐色系、４・６層が黒色系で、それぞれ類似する。

遺構は、土塁のほかに、土坑、小穴、石列、集石などを確認した。以下、詳述する。

（１）土塁（第10・11図、図版５）

調査区の周縁部に位置し、北側と西側の一部で途切れている。平面的に見た盛土の幅は2.1～4.0m。曲輪内の平坦面と土塁上面との比高差は、東西セクションＢ－Ｂ′の東側では約20cm あるのに対し、西側では10cm にも満たない。また、調査区の南西隅部では、土塁と平坦面との高さは同じになる。

土塁の特徴としては、土塁直下の地山を掘削した後に構築していることと、３層の盛土が中心部に比べて表面が固く締まっていたことが挙げられる。

盛土及び土塁直下の整地土内からの出土遺物はない。南北セクションＡ－Ａ′の６層に包含されていた炭化物を試料として年代測定したところ、13世紀中ごろ～後半との結果がえられた。

（２）土坑

SK01（第12・13図）

調査地の南西に位置する。曲輪内の整地土上面から掘り込んでいる。土坑の形状は、ほぼ円形を呈する。規模は長軸0.7m、短軸0.6m、深さは0.2m である。埋土は４層で、１層が暗褐色粘性土、２層が明灰褐色粘性土、３層が暗灰褐色粘性土、４層が黒色粘性土。４層だけ炭を多量に包含する。出土遺物はない。

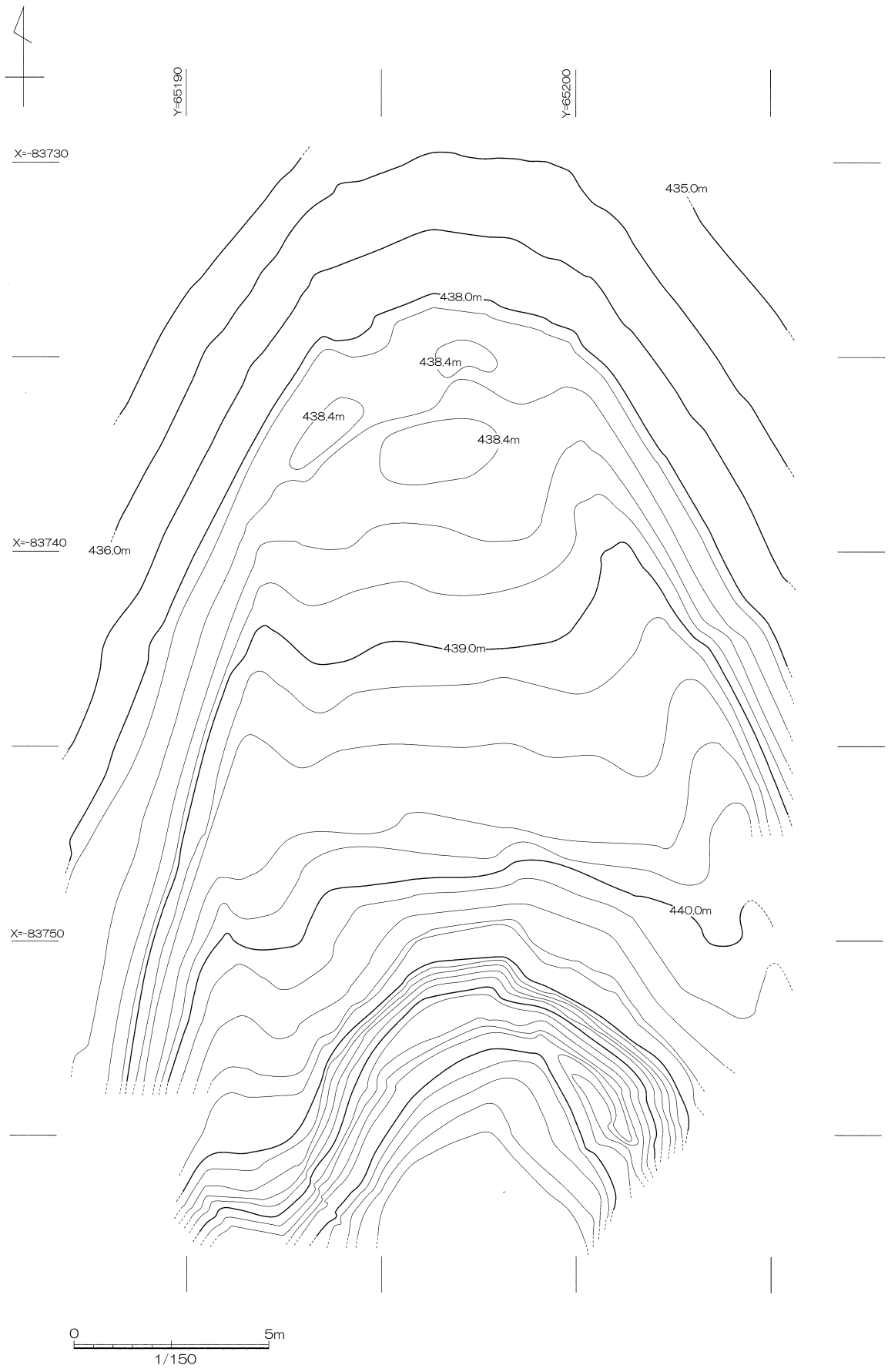
SK02（第12・13図・図版７）

調査地の南東に位置する。土塁直下の地山面で確認した。円形を呈する土坑の長軸は1.1m 以上、短軸は0.9m 以上、深さは0.2m である。埋土は２層で、１層が黒色粘性土、２層が赤色粘性土。１層には、多量の炭が堆積する。２層は焼土である。出土遺物はないが、１層に包含されていた炭化木片により年代測定したところ、９世紀末との結果がえられた。

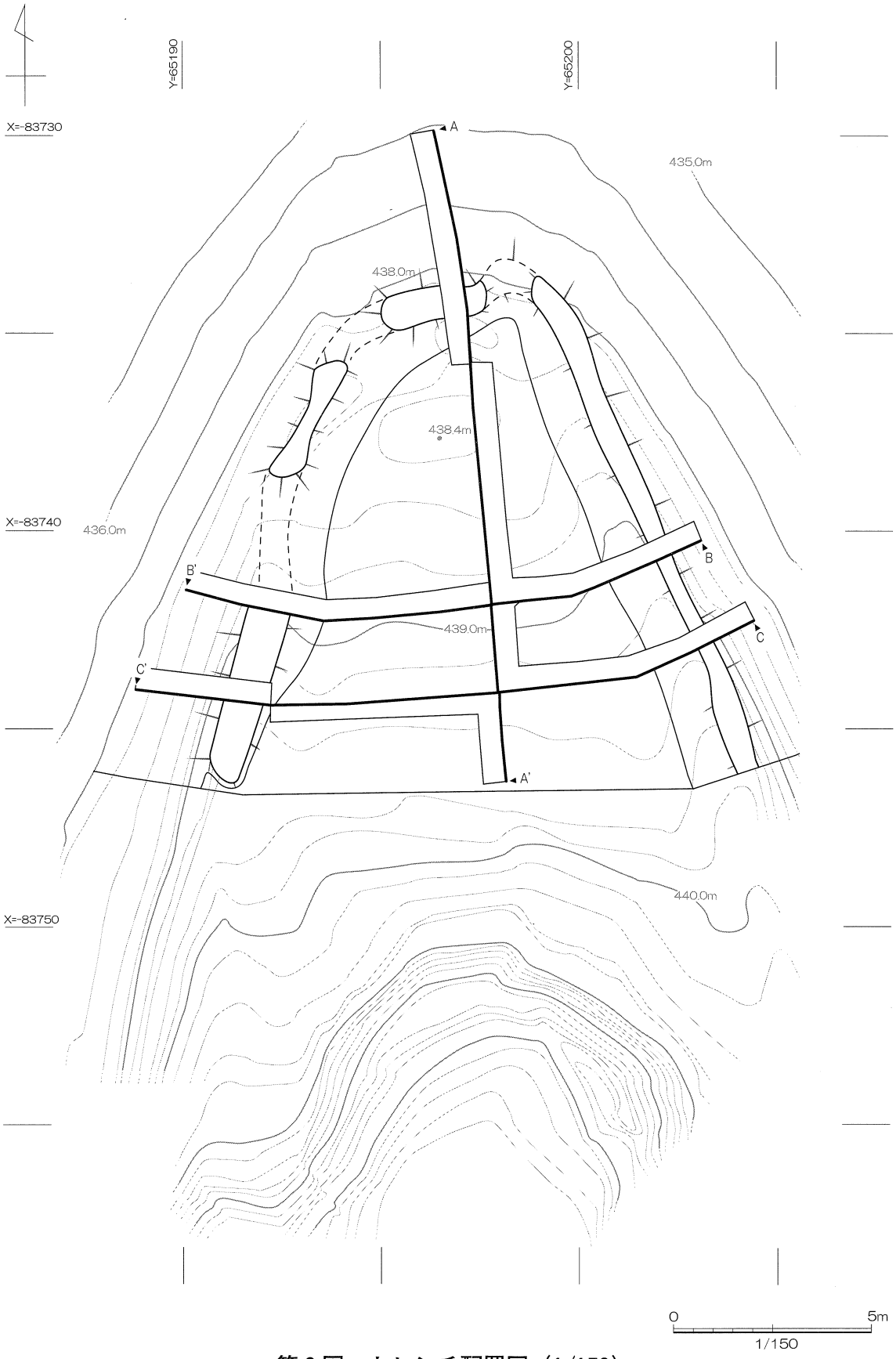
（３）小穴（第12・13図、図版７）

Ｐ１～21（表２）は調査区の南側に集中する。全て地山面で確認した。北東南西筋、東西筋、南北筋の３方向に並んでいた。また、Ｐ１～３・13・14・21は、地山の岩盤を掘削して作っている。出土遺物はない。

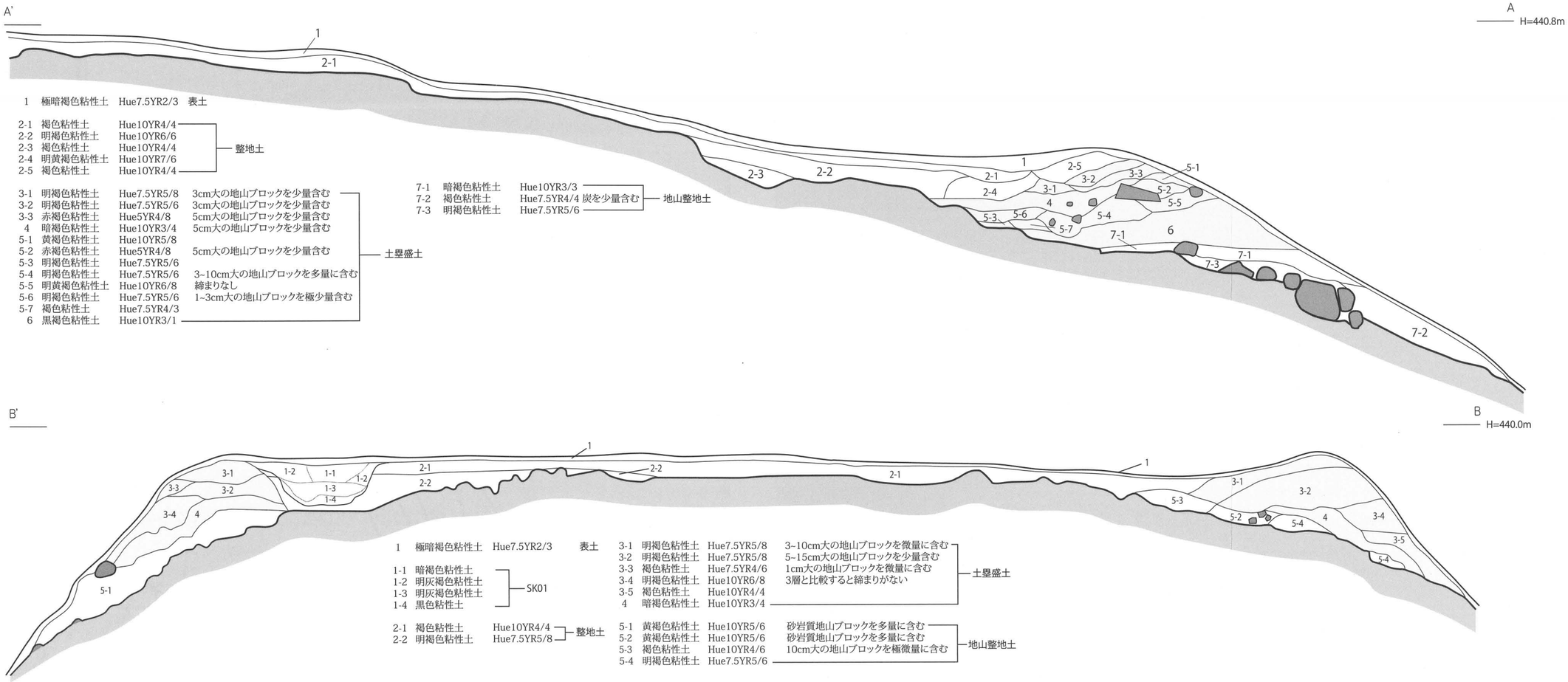
P22～26（表２）は調査地北側の土塁沿いに位置する。P25だけ盛土の４層上面で確認したが、その他は地山面で発見した。土塁との詳細な位置関係だが、P22～24は内側斜面、P26は外側斜面、Ｐ



第8図　調査前地形測量図（1/150）



第9図　トレンチ配置図（1/150）



1 極暗褐色粘性土 Hue7.5YR2/3 表土

2-1 褐色粘性土 Hue10YR4/4
2-2 明褐色粘性土 Hue10YR6/6
2-3 褐色粘性土 Hue10YR4/4
2-4 明黄褐色粘性土 Hue10YR7/6
2-5 褐色粘性土 Hue10YR4/4
— 整地土

3-1 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8 3cm大の地山ブロックを少量含む
3-2 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6 3cm大の地山ブロックを少量含む
3-3 赤褐色粘性土 Hue5YR4/8 5cm大の地山ブロックを少量含む
4 暗褐色粘性土 Hue10YR3/4 5cm大の地山ブロックを少量含む
5-1 黄褐色粘性土 Hue10YR5/8
5-2 赤褐色粘性土 Hue5YR4/8 5cm大の地山ブロックを少量含む
5-3 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6
5-4 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6 3~10cm大の地山ブロックを多量に含む
5-5 明黄褐色粘性土 Hue10YR6/8 締まりなし
5-6 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6 1~3cm大の地山ブロックを極少量含む
5-7 褐色粘性土 Hue7.5YR4/3
6 黒褐色粘性土 Hue10YR3/1
— 土塁盛土

7-1 暗褐色粘性土 Hue10YR3/3
7-2 褐色粘性土 Hue7.5YR4/4 炭を少量含む
7-3 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6
— 地山整地土

1 極暗褐色粘性土 Hue7.5YR2/3 表土

1-1 暗褐色粘性土
1-2 明灰褐色粘性土
1-3 明灰褐色粘性土
1-4 黒色粘性土
— SK01

2-1 褐色粘性土 Hue10YR4/4
2-2 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8
— 整地土

3-1 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8 3~10cm大の地山ブロックを微量に含む
3-2 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8 5~15cm大の地山ブロックを少量含む
3-3 褐色粘性土 Hue7.5YR4/6 1cm大の地山ブロックを微量に含む
3-4 明褐色粘性土 Hue10YR6/8 3層と比較すると締まりがない
3-5 褐色粘性土 Hue10YR4/4
4 暗褐色粘性土 Hue10YR3/4
— 土塁盛土

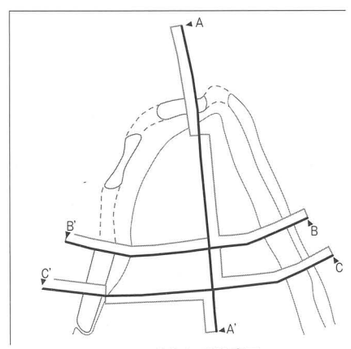
5-1 黄褐色粘性土 Hue10YR5/6 砂岩質地山ブロックを多量に含む
5-2 黄褐色粘性土 Hue10YR5/6 砂岩質地山ブロックを多量に含む
5-3 褐色粘性土 Hue10YR4/6 10cm大の地山ブロックを極微量に含む
5-4 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6
— 地山整地土

1 極暗褐色粘性土 Hue7.5YR2/3
1-1 黒褐色粘性土 Hue10YR3/1 炭化物を多量に含む
— 表土

2 褐色粘性土 Hue10YR4/4 整地土

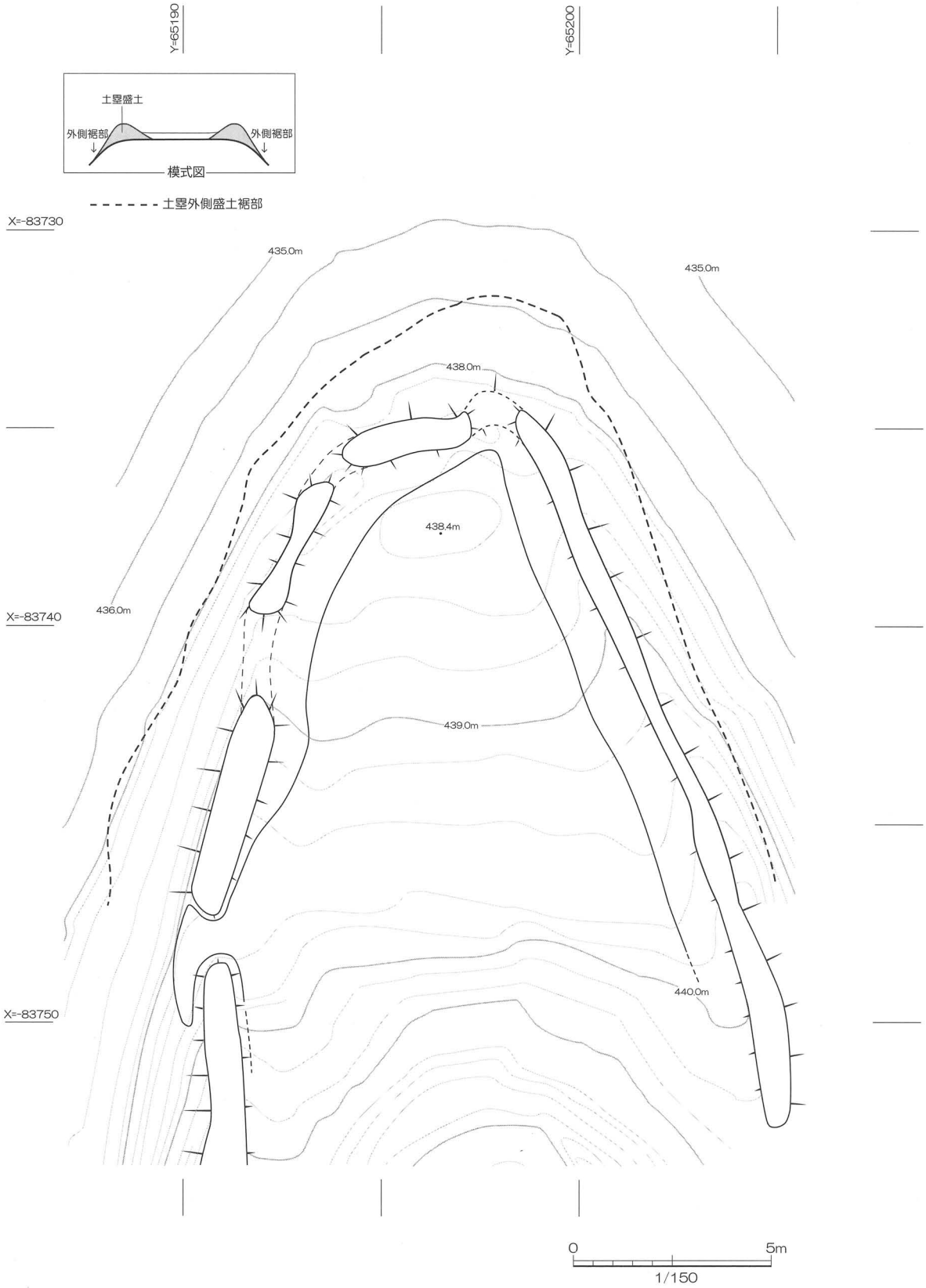
3-1 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8 3~10cm大の地山ブロックを微量に含む
3-2 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8 5~15cm大の地山ブロックを少量含む
3-3 褐色粘性土 Hue7.5YR4/6 1cm大の地山ブロックを微量に含む
3-4 明褐色粘性土 Hue10YR6/8 3層と比較すると締まりがない
3-5 褐色粘性土 Hue10YR4/6 1cm大の地山ブロックを極微量に含む
4-1 暗褐色粘性土 Hue10YR3/4
— 土塁盛土

5-1 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/6 5cm大の地山ブロックを微量に含む
5-2 褐色粘性土 Hue7.5YR4/6
5-3 明褐色粘性土 Hue7.5YR5/8
— 地山整地土



トレンチ設定図

第10図　調査区土層断面図（1/50）



第11図　土塁平面図（1/150）

25は土塁中心軸付近に位置する。出土遺物はない。

（4）石列・集積（第14・15図、図版6）

石列aは、調査区の北西部に位置し、表土掘削時に確認した。石の大きさは、いずれも30cm程度で、土塁の外側裾端部の地山直上で見つけた。

石列bは、調査区の西側中央部に位置する、土塁の3層盛土内から発見した。石の大きさは30cm前後である。

石列cは、調査区の南西部に位置する、土塁の3層盛土内から確認した。石の大きさは30cm前後である。

石列dは、調査区の南東部に位置する。表土掘削時に、土塁上面で確認した。石の大きさは10～30cm程度である。

石列eは、調査区の南東部に位置する。表土掘削時に、曲輪と土塁盛土との境界付近で発見した。石の大きさは、全て20cm以下である。

集石1は、調査区の南東部に位置する。表土掘削時に土塁上面から内側斜面にかけて、盛土の表面に山積していた。石の大きさは10～90cmと大小さまざまである。

集石2は、調査区の北東隅部に位置する。調査地内からは大小の石が多く出土しているが、その中でも、整地土内から地山直上にかけて密集する地点である。

この集積の南東隅にある、環状に置かれた石は、整地土内で確認した。石の上面の高さは、438、6m前後で揃っている。しかし、環状内に土坑や焼土等は存在しなかった。

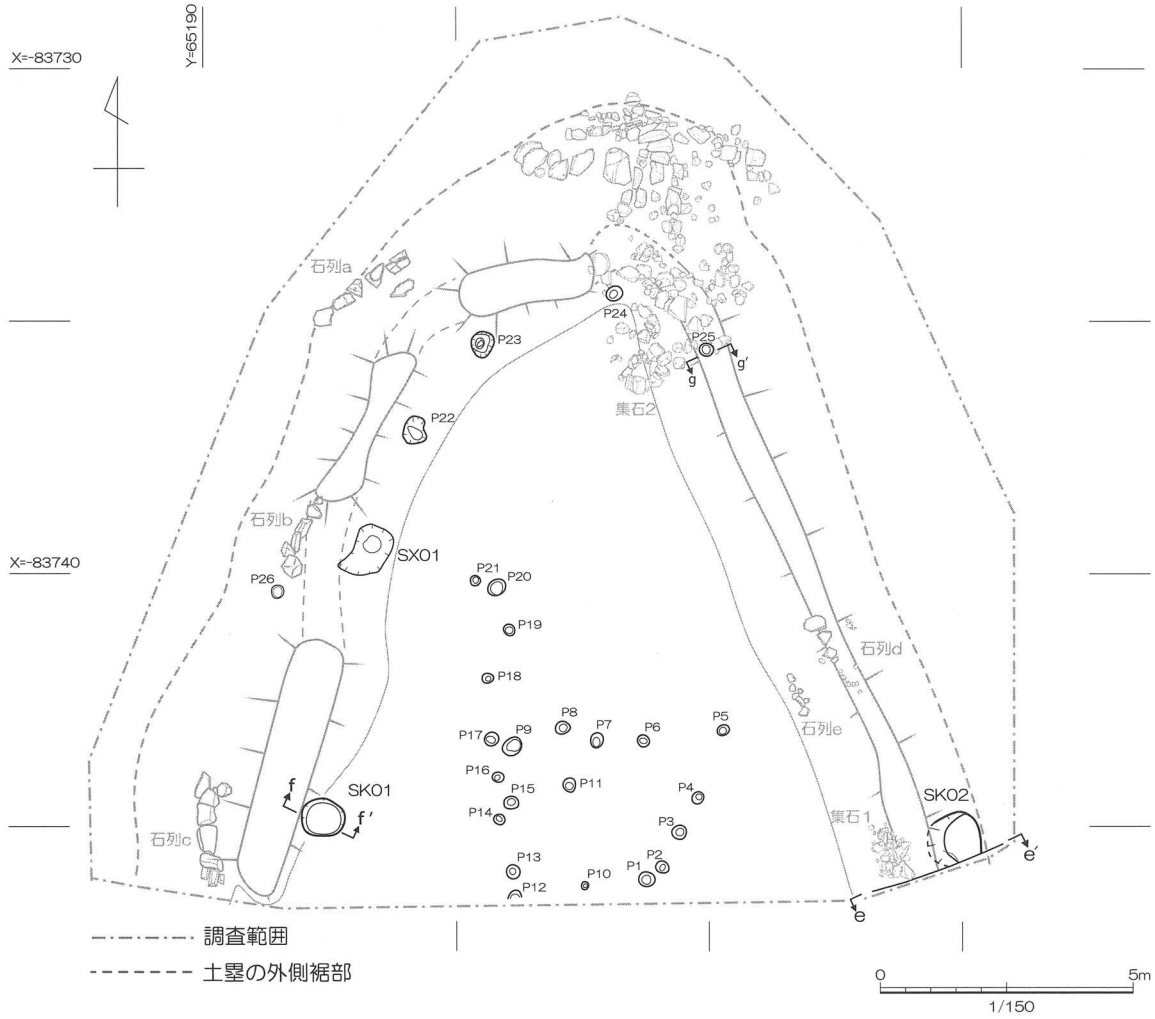
（5）その他の遺構

SX01（第12図）

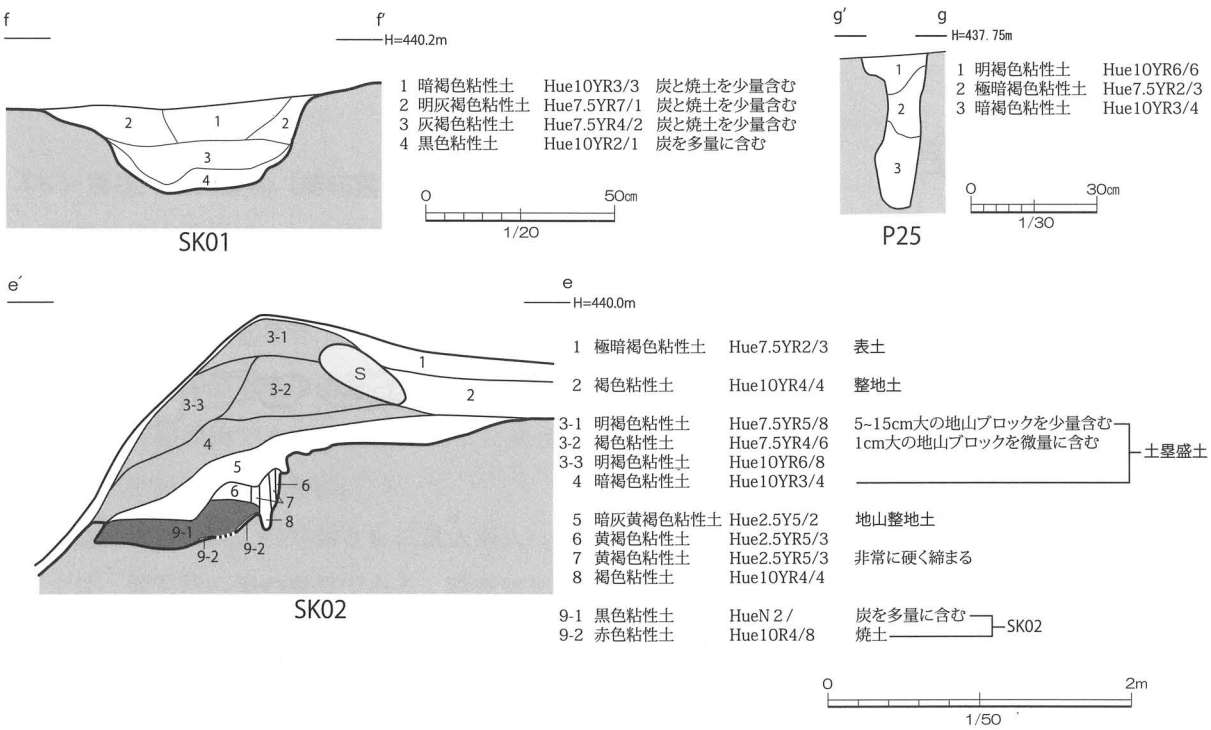
調査地中央の西側に位置する。地山面で確認した。平面形は不整楕円である。長軸は1.1m、短軸は0.7m、深さは0.6mを測る。出土遺物はない。

第2表　小穴規模

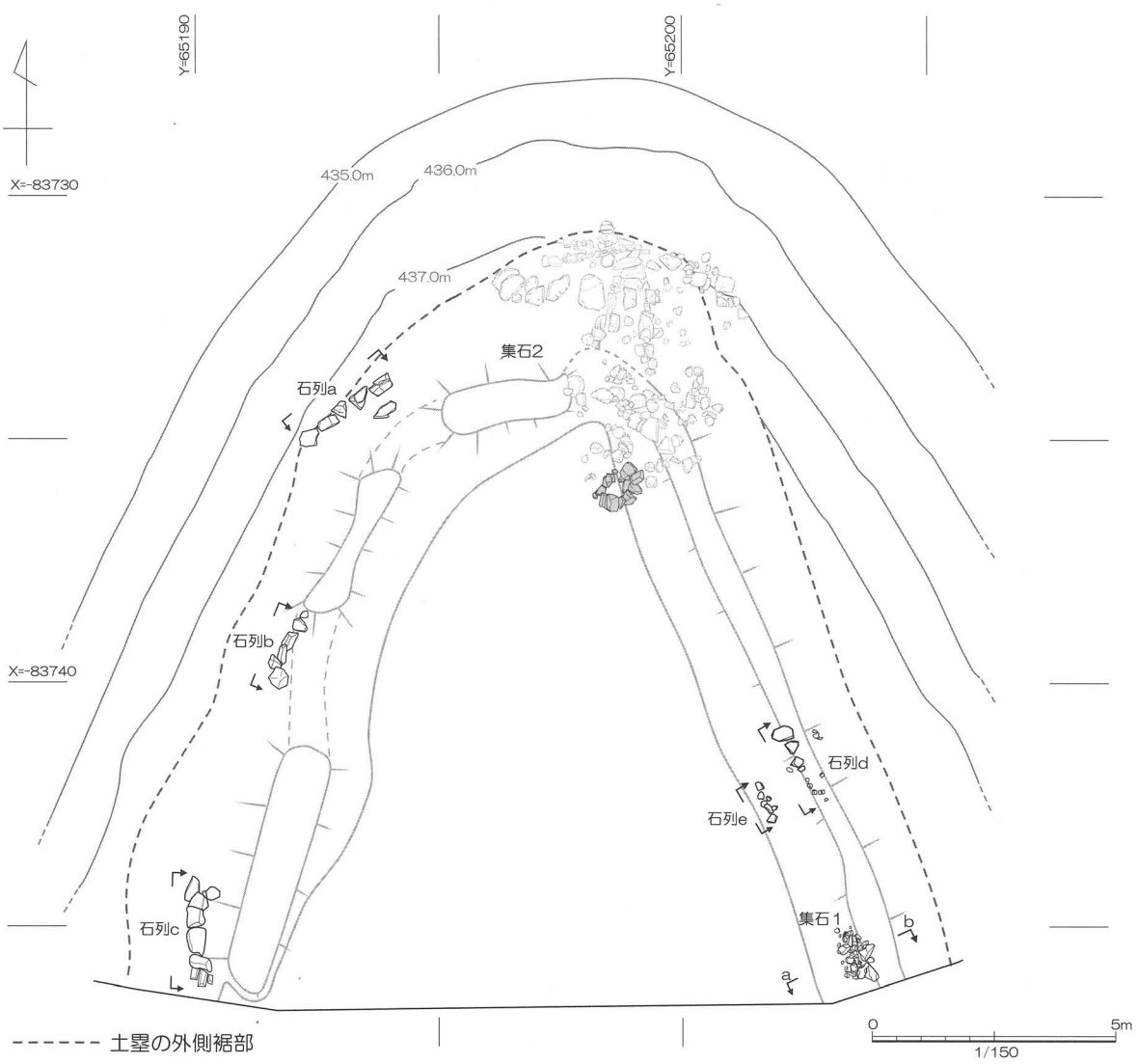
小穴名	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	小穴名	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）
P1	34	31	16	P14	24	23	13
P2	27	23	15	P15	31	26	19
P3	30	29	15	P16	24	22	16
P4	26	22	22	P17	30	27	30
P5	26	21	11	P18	24	21	12
P6	26	24	28	P19	24	22	14
P7	30	24	21	P20	40	30	15
P8	30	27	16	P21	23	21	13
P9	41	33	31	P22	57	42	25
P10	17	16	14	P23	52	46	39
P11	30	25	13	P24	34	29	15
P12	29以上	16以上	34	P25	30	27	64
P13	29	28	9	P26	25	23	25



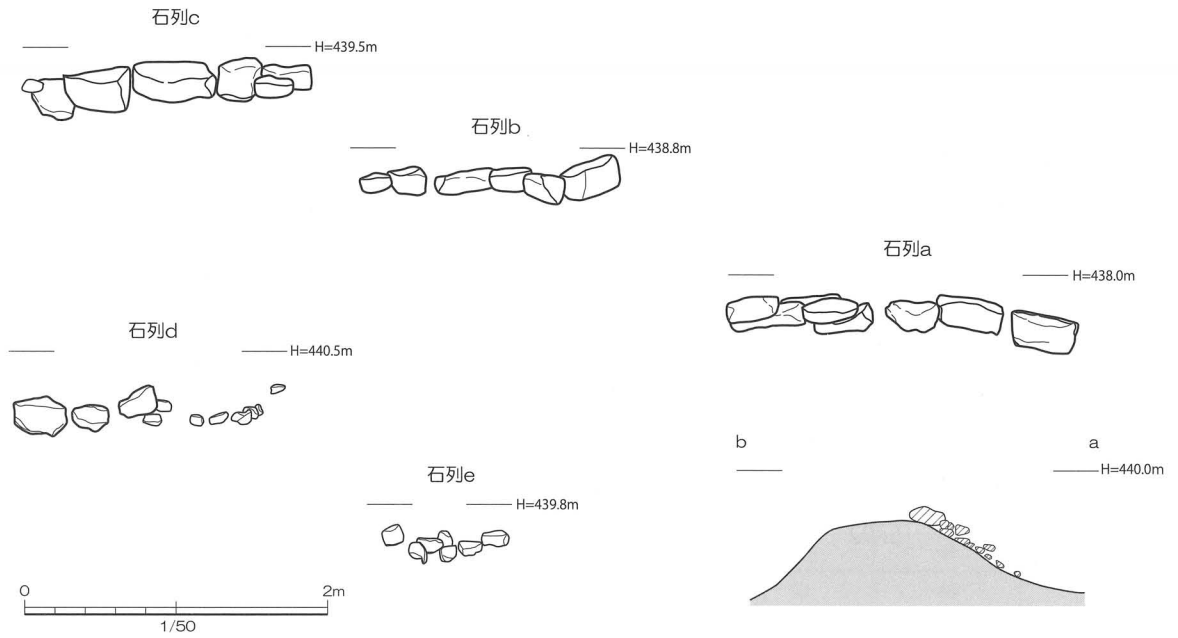
第12図　SK01・02、SX01、小穴Ｐ1～26平面図（1/150）



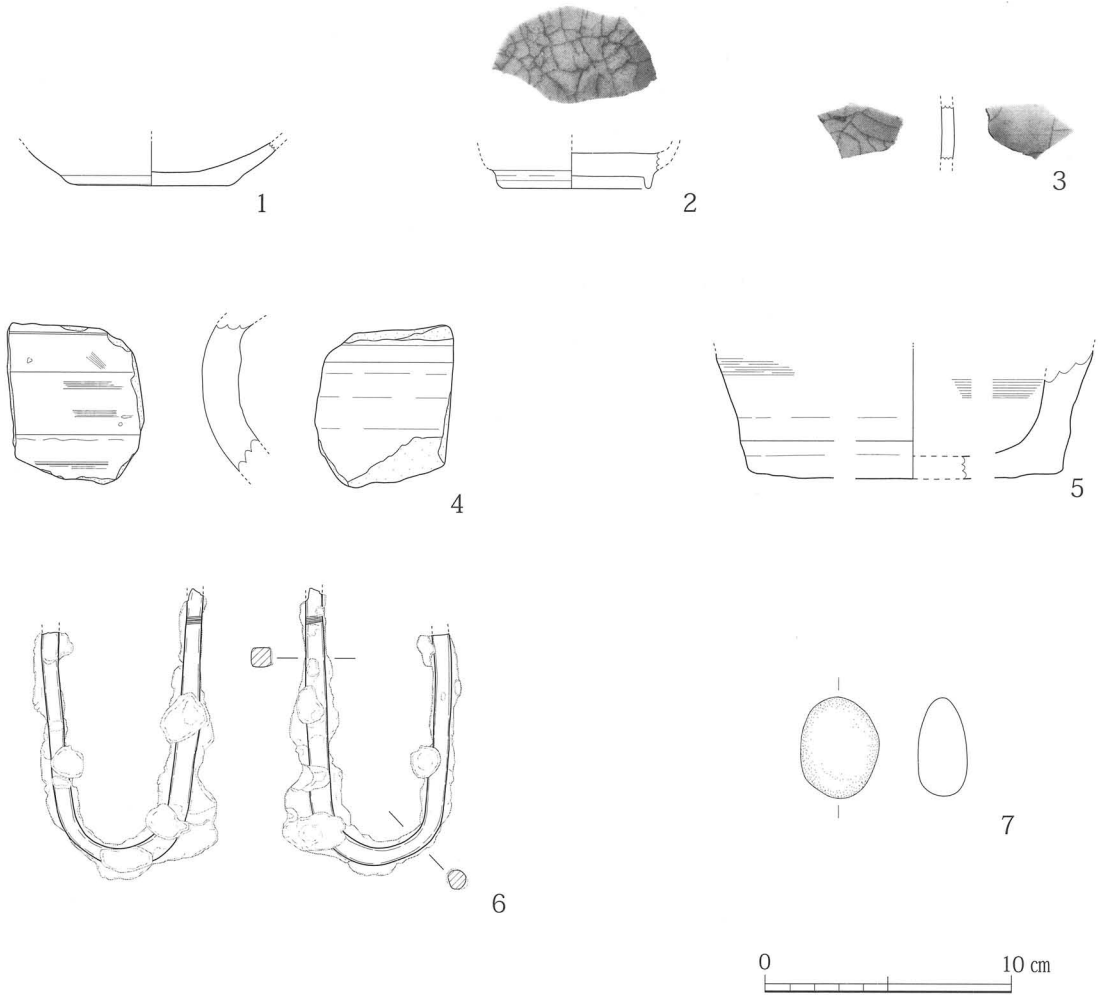
第13図　SK01・02、小穴 P25土層断面図（1/20、1/30、1/50）



第14図　石列 a～e、集石 1 ・ 2 平面図（1/150）



第15図　石列 a～e、立面図及び集石 1 断面図（1/50）



第16図　遺構外出土遺物実測図（1/3）

（6）遺構外出土遺物（第16図、図版8）

遺構外出土遺物は、土師質土器1点・陶器2点・磁器2点・鉄器1点・円礫1点である。円礫は、曲輪内整地土から、その他は表土直下から出土した。

1は、土師質土器の杯である。反転復元した底径は6.3cm。胎土は、細礫を僅かに含むものの、精緻である。体部下半には強いヨコナデを施す。色調は明黄褐色（Hue10YR6/6）。

2は、青磁の碗である。反転復元した底径は6.0cm。高台内以外を施釉し、貫入も入っている。時期は15世紀～16世紀初頭。

3は、青磁の碗。内外面ともに貫入が入っている。磁器は15世紀～16世紀初頭。

4は、備前焼の甕の頸部である。時期は15世紀以降である。

5は、底部である。体部はヨコナデ、底部はナデを施している。

6は、不明鉄器である。「U」字形を呈する。直線部の断面は四角形、曲線部の断面は円形を呈する。直線部の先端には、6mm幅の薄い鉄を巻きつけている。

7は、円礫である。加工痕はない。

第４章　ＡＭＳ年代測定分析

第１節　出土炭化物の年代測定

高瀬山城跡の築城時期を明らかにすることを目的として、東側土塁の下層で検出したSK２（№１地点）で２点、平坦面北端部（№２地点）で１点の炭化木片を採取し、これら合計３点を試料としてAMS（加速器質量分析）法による年代測定分析を実施した。

１．AMS 年代測定法の原理

大気圏上層で熱中性子化した宇宙線が、窒素原子と原子核反応（$^{14}N^{+n}\rightarrow{}^{14}C+H$）を起こして放射性炭素（$^{14}C$）が生成される。この放射性炭素（$^{14}C$）は、$CO_2$として炭素リザーバー（大気1.6%、腐植2.6%、生物圏0.8%、浅海2.0%、深海93%）に貯蔵され、一方では、5568（5730）年の半減期でβ－壊変を起こす。光合成等の生命活動を通じて生物体に固定される^{14}Cの初期量は、それぞれの生命活動が行われたリザーバー中での^{14}Cの平衡状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の^{14}C濃度を測定し、現在の^{14}C濃度と比べることにより、その生物が死んでから現在（ただし、1950年を現在とみなす）までの経過年数がわかる。

２．前処理及び測定方法

（１）前処理

塩酸による酸洗浄（試料により、水酸化ナトリウムによるアルカリ処理）。

（２）試料の調整

酸化銅とともに加熱し、二酸化炭素を精製。

精製ラインにおいて水、二酸化硫黄などの不純物を除去。

精製した二酸化炭素を水素と鉄とともに加熱し、グラファイトに調整。

アルミ製ターゲットホルダーにプレス圧入。

（３）測定

AMS（加速器質量分析）法による。

タンデム型イオン加速器を用い^{14}C濃度を測定する。

（４）年代計算

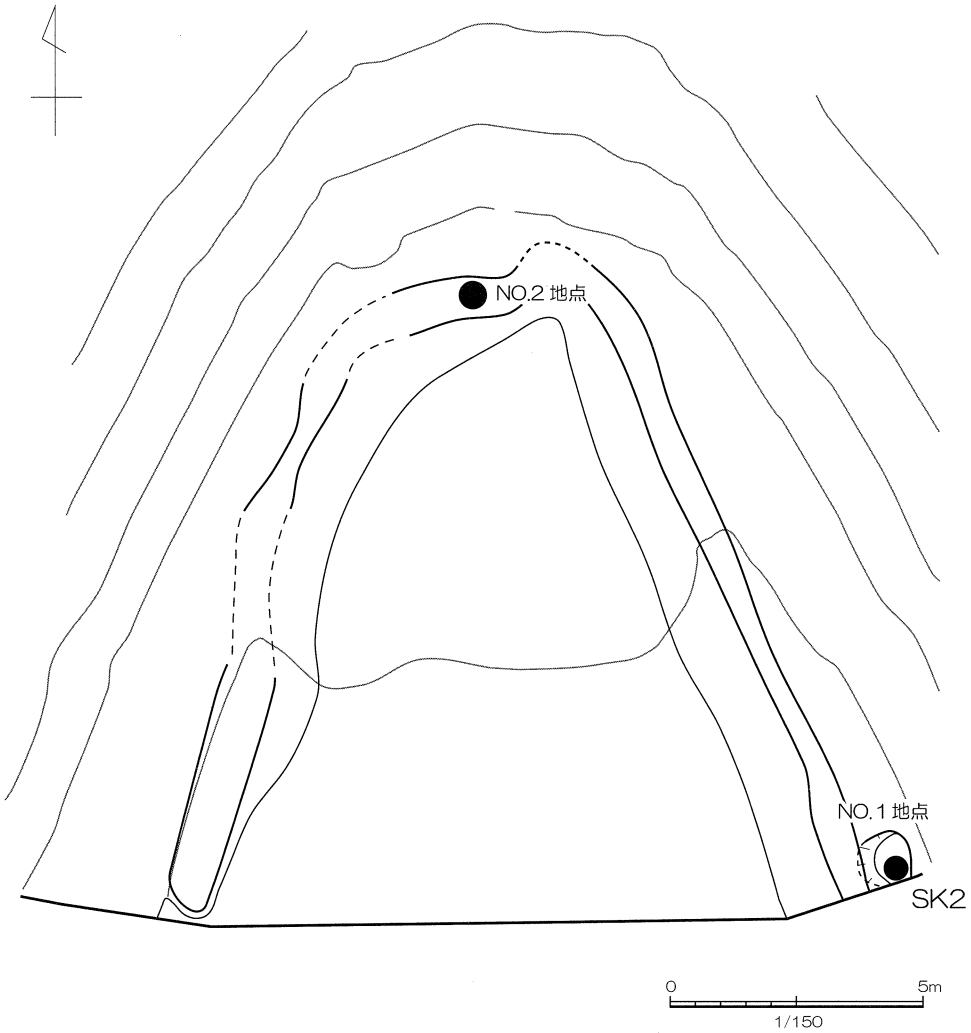
年代計算を行う際には、^{14}Cの半減期を5568年として行う。

（５）補正計算

$\delta^{13}C$を測定・算出し、（４）で得られた年代値を補正する。

（６）歴年代較正

OxCal ver. 4.15（Bronk Ramsey, 2009）を用い、INTCAL09（Reymer et al, 2009）データを利用して算出する。



第17図　試料採取地点位置図

第２節　年代測定の結果

１．AMS 年代測定結果

第18図及び第３表は３点の試料による年代測定結果である。第３表には、４種類の年代と $\delta^{13}C$ 値を示した。

測定年代は、従来は実年代として用いられてきた値である。^{14}C 濃度が環境、時代にかかわらず常に一定であるという仮定の下に、リビーの半減期（5568年）を用いて計算した値である（$\delta^{13}C$ 補正を行っていない値であり、通常、算出値を５年単位で丸めて示すが、ここでは算出値をそのまま示す）。

補正年代は、^{14}C 濃度が環境により変動することから、$\delta^{13}C$ を測定し、$\delta^{13}C=-25‰$ に規格化した14C 濃度を算出し、年代値を再計算したもの（暦年較正用年代）を５年単位で丸めた値である。

これらの年代は、いずれも西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。一方、暦年較正年代は、時代（時期）とともランダムに変化している大気中の二酸化炭素の14C 濃度を、樹木の年齢

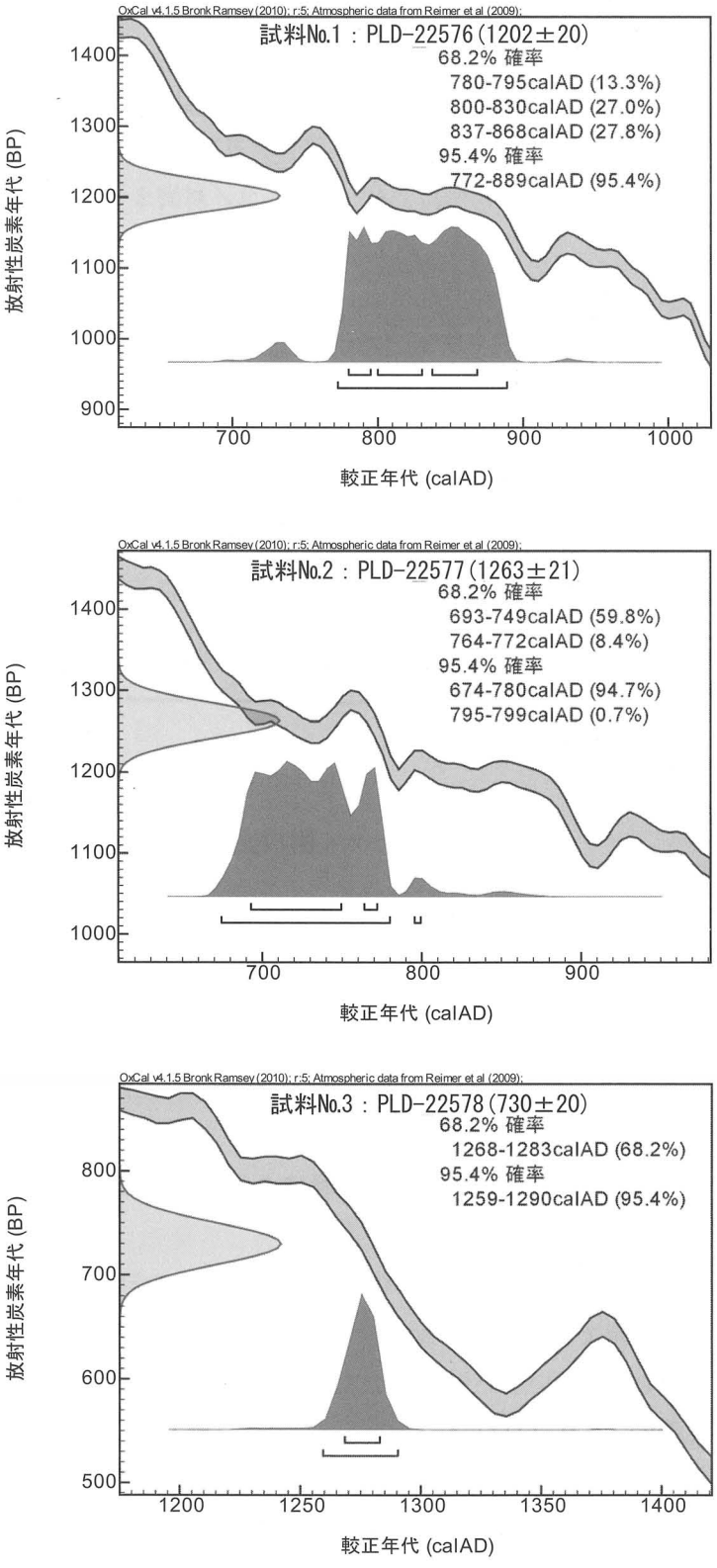
や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年齢から明らかにして得られた暦年代較正データのINTCAL 09（Reymer et al, 2009）を用いて較正したものである。この較正にはOxCal ver. 4.15（Bronk Ramsey, 2009）を用いている。また、較正に必要な補正年代値として、補正年代ではなく暦年較正用年代を用いている。

2．年代測定値について

高瀬山城については、表土直下で検出した土器が概ね15世紀頃のものであったこと以外に、その年代を示すデータがなかったため、検出した炭化木片によって年代測定を実施しようと試みた。今回、年代測定を行った試料は、いずれも地山直上の堆積層から採取したものであったことから、この分析によって築城の年代が明らかになることが期待されていた。

AMS（加速器質量分析）法によって得られた年代は、№1地点の2試料がAD772－889年、AD674－799年を示した。両者は奈良時代末、平安時代初頭の誤差範囲で重なっており、試料を採取したSK2はこの時期の遺構と考えることもできる。ただし、試料は炭化木片であり、試料そのものが持つ誤差が大きく、平安時代前半（9世紀末）の遺構と考えることもできる。一方、№2地点の試料はAD1259－1290年（鎌倉時代中頃～後半）を示した。

これらのことから、高瀬山の頂部付近では古代以降、人間の営みが行われていたことが明らかになり、さらに多くの時期の遺構が重なっていることが示唆される。（渡邉正巳／文化財調査コンサルタント株式会社）

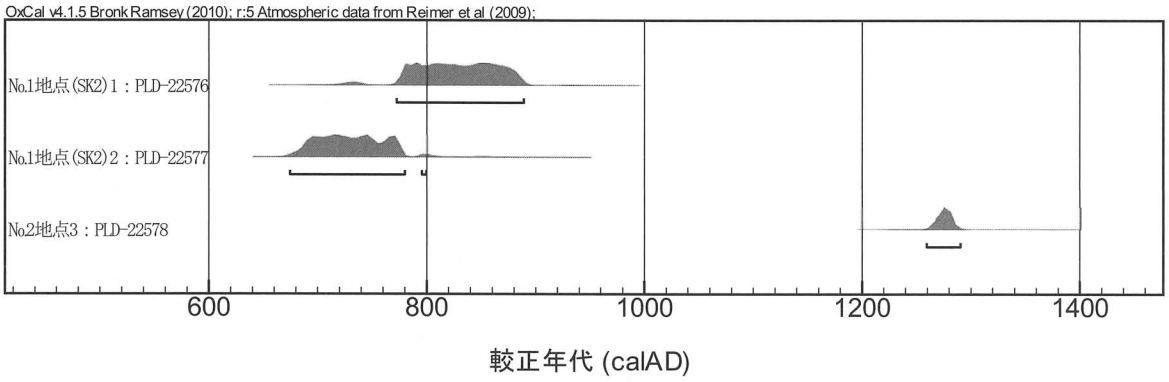


第18図　歴年較正結果①

第3表　AMS年代測定結果

試料				測定年代*1	$\delta^{13}C$	暦年較正用年代	補正年代*2	暦年較正年代		測定番号
試料No.	種別	出土地点ほか	重量(g)	(yrBP±1σ)	(‰)	(yrBP±1σ)	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	(PLD−)
1	炭化木片	No.1地点(SK2)8層	0.3981	1233±21	−26.91±0.20	1202±20	1200±20	AD780−795(13.3%) AD800−830(27.0%) AD837−868(27.8%)	AD772−889(95.4%)	22576
2	炭化木片	No.1地点(SK2)8層	0.8474	1287±22	−26.47±0.24	1263±21	1265±20	AD693−749(59.8%) AD764−772(8.4%)	AD674−780(94.7%) AD795−799(0.7%)	22577
3	炭化木片	No.2地点	0.2659	512±20	−11.68±0.19	730±20	730±20	AD1268−1283(68.2%)	AD1259−1290(95.4%)	22578

*1 $\delta^{13}C$ 補正無年代　*2 $\delta^{13}C$ 補正年代



第19図　歴年較正結果②

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337−360.

Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Southon, J. R., Talamo, S., Turney, C.

S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009). IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0−50,000 years

cal BP. Radiocarbon, 51 (4), 1111−1150.

第５章　総　　括

第１節　雲南市高瀬山城の構造について

はじめに

雲南市高瀬山城跡については、島根県教育委員会による中近世城館跡分布調査事業の記録『出雲・隠岐の城館跡』（以後『出雲・隠岐』と略す）では「明確な遺構なし」と報告されている。（注１）しかし、本報告書で述べられているような事情によって再度調査したところ、土塁に囲繞された曲輪や、緩斜面の竪堀、尾根筋を切断する堀切などを伴う明確な山城遺構を確認することができた。

ここでは縄張り調査によって知り得た知見を中心に高瀬山城の構造について述べることとしたい。のちに詳述する予定であるが、当城は近隣の他の山城遺構と比較するとかなり特異な構造を持っていることが明らかになった。したがって、周辺を鳥瞰的に眺めながら検討を加えたいと考えている。ただその範囲については、島根県東部つまり旧出雲国に限定することとしたい。

なお、文献史料を用いながら、築城や改修の背景や経過、あるいはその主体などの検討が必要であるが、限られた時間のなかでは、明確に当城を指している信頼できる文献史料を抽出することができなかった。

ただ、永禄13年（1570）と推定される２月７日付けの湯原元綱宛小早川隆景書状（注２）には、当地域に関係する記述がある。それによると、尼子勝久・山中鹿介らによって尼子家復興戦が開始されたため、富田城に向けて進撃した毛利勢が、１月28日に「多久和両城即時切崩」して、多久和大和守をはじめとして尼子方数百人を討ち果たしたというのである。つまり多久和氏をはじめとする尼子方は、「多久和両城」を拠点として迎え撃とうとしたが、毛利勢に撃破されてしまったのである。

問題は隆景書状のいう多久和の二つの城がどことどこを指すかであるが、『出雲・隠岐』によると、三刀屋町多久和地内には高瀬山城を含めて五カ所の城跡が確認されている。後述するように、筆者は「多久和両城」とは福谷城と多久和城の両城を指すと推定しているが、高瀬山城を指す史料は確定できないのである。残念ながら後考を待つこととしたい。

また、紙幅の制約から位置図や縄張り図の掲載は最小限に留めた。あわせてご了解いただきたい。

１．高瀬山城の地取りと縄張り

（１）高瀬山城の地取り

高瀬山城は、雲南市三刀屋町多久和の高瀬山の山頂部（標高445.9m）に地取りしている。高瀬山は近隣での最高峰であり、これが防災無線の電波塔を設置する場所として選定された理由である。周辺から仰ぎ見られるこのような高所に地取りしたことが、高瀬山城に期待された役割を端的に物語っていると言えよう。また、高瀬山は裾の広い山塊で、東側は斐伊川、西側には飯石川が流れる。山頂部から東西方向に尾根が伸びており、これからさらに大小多数の支脈が伸びている。そのうち、東方の尾根には約150m 離れた位置にひとつのピークががあって、ここにも普請が施されている。

交通路としては、三刀屋町多久和から垰(たわ)をへて木次町上熊谷につながる道が山塊の北側を通っており、三刀屋町六重(むえ)から神代(こおじろ)をへて木次町川手へ向かう道が南側を通っている。しかしともに広い山塊の裾野を廻っているので、高瀬山城は直接的に交通路を押さえる機能を求められていたのではなさそうである。ただ後述するように、北西の下方に見下ろす多久和の地は地域内交通の要衝であり、福谷城（標高300m）や多久和城（標高140m）よりさらに高所からこれに掣肘を加えようとする意図があった可能性は高い。

（2）高瀬山城の縄張り

高瀬山城跡は、その山頂部を削平して造成された、土塁に囲まれた二段の曲輪からなる。（第20図参照）そして、前述のように東方約150mのピークにも、そのほぼ半周を土塁に囲まれた曲輪が存在する。山頂部との高低差は約25mである。このさらに東方の鞍部には土橋（第20図-a）を残した堀切が認められる。したがって、もとより西方の山頂部の曲輪群が高瀬山城跡の主要部ではあるが、東方のピークを含めて縄張りがなされたと思われる。そのため、以後便宜的に前者を西郭群、後者を東郭群と呼んで考察することにしたい。

西郭群は、ほぼ全周を高さ10～40cm程度の土塁に取り囲まれた主郭と、その北側に接する複郭とからなる。この二つの曲輪は緩やかな傾斜の通路でつながっているから、実質的には単郭とみてよかろう。

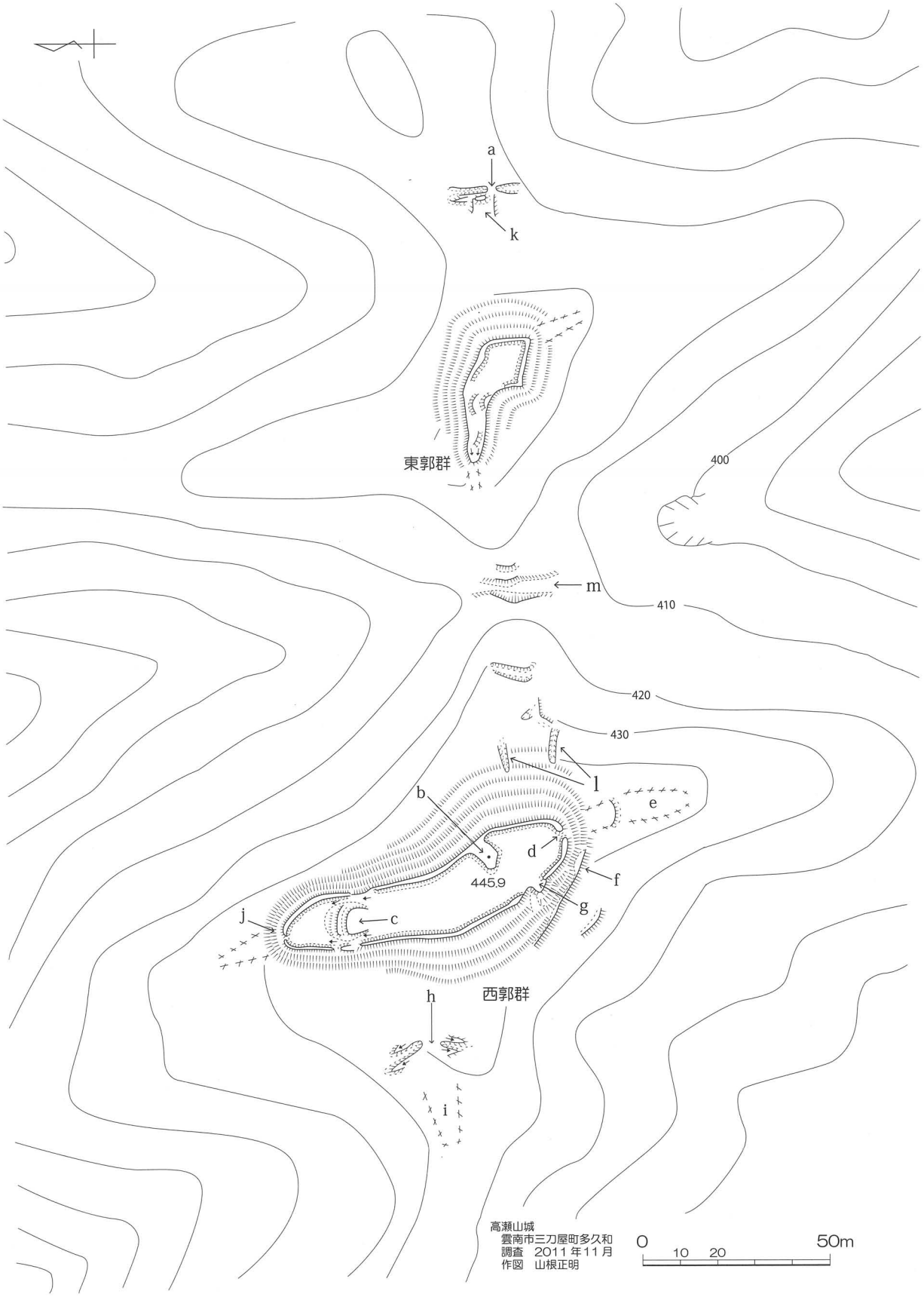
主郭のほぼ中央には一段高い基壇（第20図-b）があり、445, 9mの三角点はこの上に設置されている。櫓台とみられるが、この位置には基盤岩の露頭があるので、そのために掘削できなくて残った可能性もある。主郭の北端も、おそらくは基盤岩の露頭があるために中央部（第20図-c）が残されたもので、前述のようにその両側は緩やかな傾斜で複郭とつながっている。

主郭の南端には土塁の途切れた部分（第20図-d）があり、虎口の役割を果たしている。つまり、この斜面を下ると、その裾から南方にむかって、幾分かは平坦に加工されたと思われる広がり（第20図-e）がある。したがって主郭南端の土塁の途切れは、駐屯空間と主郭をつなぐ平入りの虎口である。

南方の駐屯空間（第20図-e）からは、主郭の西側の裾を廻る通路（第20図-f）が北方に向かって伸ばされている。この通路を見下ろす主郭の西側にも土塁の途切れる部分がある。その南側（第20図-g）は塁線が突き出ており、西側の通路から主郭へ登る坂虎口を守るための折(おり)とみてよい。また、裾を廻る通路は主郭西側の尾根筋に向かって続く。西側の尾根筋には、土橋を残した堀切（第20図-h）の外側にやはり平坦に加工されたと思われる広がりがあり（第20図-i）、ここも駐屯空間として利用された可能性がある。

複郭は、前述のように緩やかな傾斜の通路で主郭とつながっているが、この曲輪も周囲に土塁をめぐらせている。この土塁が別稿で詳しく報告されるように特異な構造を持つものであるが、その北端は稜線に向かって開口している（第20図-j）ので、主郭に至る北方の虎口をなしている。

東郭群は、西側（西郭群側）を除く三方向を土塁に囲まれた単郭の曲輪からなる。前述のように、このさらに東方には土橋（第20図-a）を残した堀切が認められる。その西側には堀切に面して土塁（第20図-k）が築かれている。おそらく土塁上には塀が建てられて内側を見通されない工夫がされていたと考えられるので、この土塁は笠(かさ)の土塁とみてよかろう。通路としては、この土塁の南端を



第20図　高瀬山城縄張り図

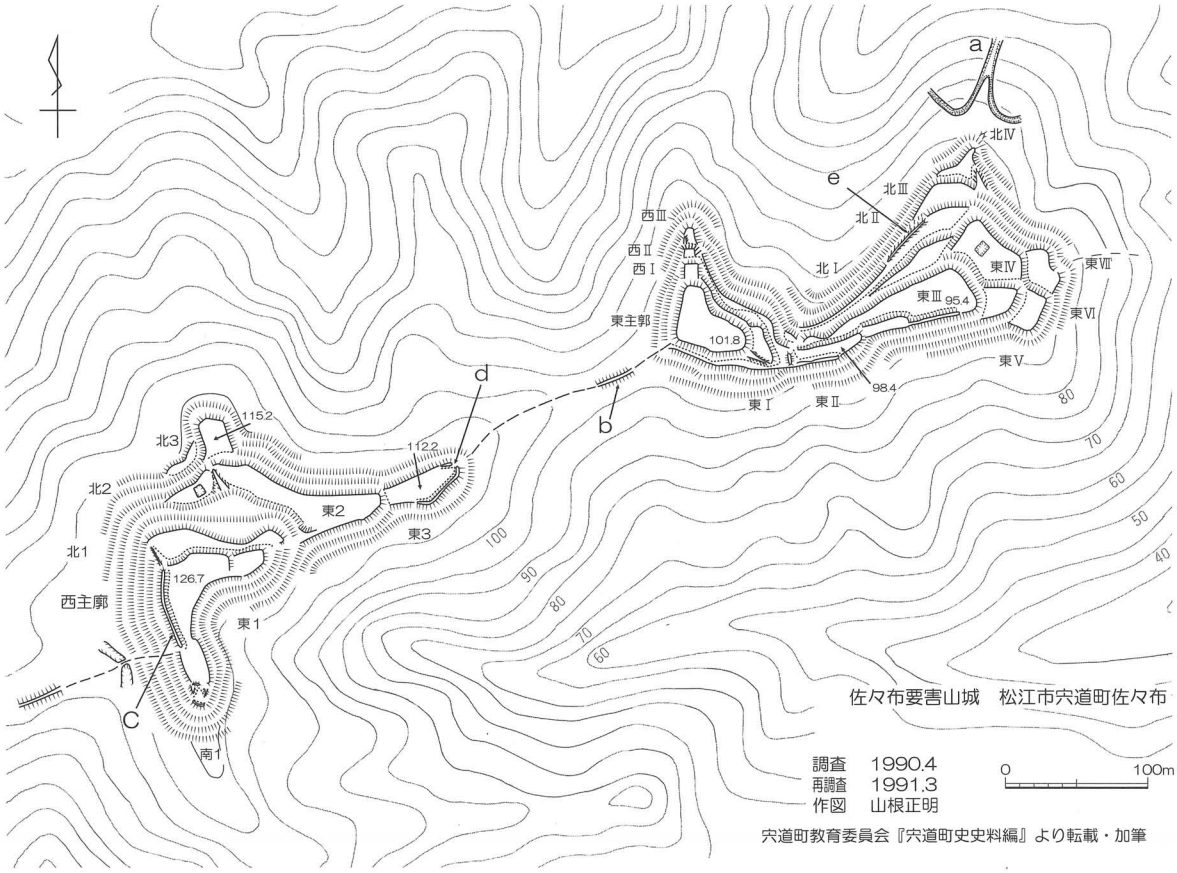
すり抜けるようにして東郭群に向かう斜面を登ることになるが、南側を削り落としてわざと通路を狭くしようする縄張りが認められる。

つまり高瀬山城は、約150m 離れた二つのピークにそれぞれ単郭の曲輪が設けられた山城なのである。そしてその二つの郭群をつなぐ稜線には二本の堀切が掘られている。堀切を設けるねらいは、言うまでもなく稜線づたいの攻撃を防ぐという遮断効果を狙っての縄張りであるが、高瀬山城の場合だと両郭群の縄張り観も普請技法も別々のものとは考えられない。ましてや、一方が他方の向城（むかいじろ）として築城されたなどとは全く考えられない。両郭群は一体の城郭として縄張りがなされ普請が施されたものであろう。したがって、高瀬山城はいわゆる一城別郭の城とみてよい。

なお、西郭群の東側斜面には二本の竪堀（第20図-1）が掘られている。敵襲によって東郭群も陥落した場合を想定しての普請であろうが、他の斜面には確認できなかったので、縄張り上では、東側の尾根づたいの攻勢を最も警戒していたと考えられる。

（3）一城別郭の城

一城別郭の城はきわめて類例が少ないが、典型例の一つが松江市宍道町佐々布の佐々布要害山城跡（第21図参照）である。佐々布要害山城は、約400m 離れた東西二つの主郭とそれぞれに連なる多数の郭群からなっており、それぞれが独自の防御機能を持ちながら最終的には西主郭に収斂する縄張りとなっている。（注3）おそらく、室町期に周辺を支配した佐々布氏の詰城（つめしろ）としてまず西郭群（標高126.7m）が築かれ、戦国期になってから、東側の稜線上に、佐々布川の谷筋を移動する



第21図　佐々布要害山城縄張り図

兵員のために駐屯空間を広く取った東郭群（標高101.8m）が築かれたのであろう。そして、東郭群が築かれる時期に西郭群の普請も同時並行して施されたと考えられる。その普請の時期は特定できないが、城域の東端に認められる、二本の尾根筋に掘った堀切を一本に合流させて下らせる（第21図-a）という技法が、石見国内の城跡に散見できる（邑智郡邑南町鱒淵　二ッ山城跡など）ところからすると、毛利氏に従って出雲に侵攻してきた外部勢力による縄張りと普請とみてよかろう。

一城別郭の城の場合、二つの曲輪群が相互の防御と攻勢を補完しあうことで「一城」として機能するところに特徴がある。佐々布要害山城の場合、西曲輪群の東端の東３郭は、東曲輪群の東主郭から約170m離れている。東主郭からは、標高差約４mの斜面をいったん下ってから約15mの標高差の斜面を登って東３郭に至ることになる。この間は部分的に土橋状に通路（第21図-b）が造られているだけで、東郭群が陥落した場合を想定して東側からの攻勢を切断しようとする意識はない。その意味では、長野県善光寺平周辺で報告されている一城別郭の城とは対照的である。（注４）つまり、春山城では鞍部の堀切で、井上城では三重の堀切で、若槻山城でも三重の堀切、大峰城でも三重の堀切で切断されているのである。

高瀬山城の場合は二つの郭群をつなぐ稜線に二本の堀切が掘られている。このうち（東）側の堀切（第20図-m）は高低差約2.2mのしっかりした普請が施されているので、東側からの尾根伝いの攻勢を遮断する意識があるとみてよかろう。

２．高瀬山城の普請

（１）高瀬山城の普請

繰り返し述べるように、高瀬山城の普請の特徴は曲輪を囲繞する土塁にある。一般に土塁の築造方法としては、せり出して造成した曲輪の端に版築状に積み上げて築く方法と曲輪の上面を削り残した端を土塁とする場合がある。ところが高瀬山城の場合は地山を掘り下げて基礎を固め、その上に土塁を築いているのである。発掘調査で確認された西郭群の複郭部分だけでなく主郭も、さらに東郭群の土塁も、同様な築造方法で築かれたものとすると膨大な工事量となろう。

反面、曲輪そのものを方形に造成しようとする意図は認められず、旧地形に沿って不定型なままとしている。また、斜面に対する防御としては二本の竪堀（第20図-l）が認められるだけである。尾根筋の切断については都合三本の堀切をもって防御としているが、それほど大規模な普請とは言えない。曲輪上面の削平については、西郭群は丁寧だが、東郭群の西側半分ほどは自然地形に近いままにしておかれている。西郭群の南側（第20図-e）と西側（第20図-i）の駐屯空間と推定される尾根筋も、ほとんど普請の鍬は入っていないと思われる。

（２）土塁を伴う城館遺構

さて、旧出雲国内で確認されている土塁を伴う城館遺構を集計すると付表 土塁を伴う城館遺構（出雲国）のようにまとめられる。集計にあたっては、（第21図-c）のように、断続的であっても特定方向からの攻勢を想定してこれを防ぐために設けられたと考えられる場合を「塁線上」とした。（第21図-d）のように、特定の曲輪を囲い込もうとした場合には「囲繞」と分類した。また、（第21図-e）のように登城道を防御するために斜面に沿って設けられている場合は「登土塁」とした。なお、傾斜面を削り込んで土塁を造るにあたり、一部を削り残して側壁とする、いわゆる「竪土塁」とし

ている場合は「塁線上」に分類してある。

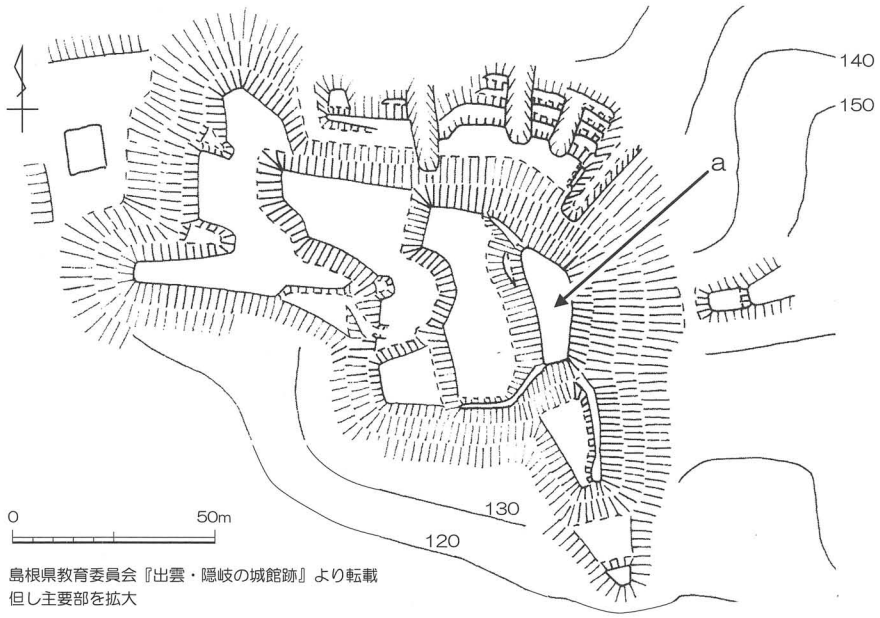
高瀬山城跡では、自然地形に沿った塁線上に囲繞させて土塁を築いて攻勢に備えようとしており、そもそも「塁線上」か「囲繞」かの両者を截然と区別するのは困難である。さらに、提出された調査カードからの読み取りにも限界があり、調査者による遺構の判読能力の差までさかのぼる（そもそも土塁は崩落しやすい）と、統計処理になじまないといっても言い過ぎでないことをあらかじめことわっておかなくてはならない。

そうした制約や限界を踏まえたうえで、旧出雲国内の城館遺構を鳥瞰してみると、土塁を伴う城館遺構数（207）は全遺構数（570）の36.3%になる。（以下付表　土塁を伴う城館遺構（出雲国）参照）このうち、塁線上に土塁を築いて特定方向からの防御としている遺構（119）は57.5%、曲輪を囲繞させている遺構（76）は36.7%で、登土塁（23）は11.1%である。また、城館を構成するその他のパーツのなかで、土塁と相関関係が高いのは堀切で、土塁を伴う遺構のうち堀切の掘られている遺構数（133）は64.3%になる。竪堀を伴う遺構（50）は24.2%、連続竪堀伴う遺構（22）は10.6%である。なお、櫓台を伴う遺構（40）は19.3%である。

つまり、旧出雲国内の城館遺構にあっては、曲輪の造成にあたって土塁を築いて防御を強固なものにするという縄張り観が反映され、それによる普請技法の痕跡を伝える城館遺構は、相対的に少ないと言わざるをえない。

（3）多久和地域の山城遺構

近隣での具体例を上げると、直近（直線距離にして約1.4km 西方）の福谷城跡は、多久和・六重・中野・神代に広がる多久和郷の中心たる多久和（以後多久和本郷と呼ぶ）の水田と集落を北方に見下ろす丘陵頂部（標高300m）に地取りしている。当城の城域は広大で、東西300m 南北430mに及ぶ。その縄張りを見ると、主郭の南端と西側下方の副郭南端は土塁のラインが連続している。また、城域の南端は土橋を残した堀切で切断されており、これに北接する曲輪は堀切に面する側と



島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』より転載
但し主要部を拡大

第22図　多久和城縄張り図

東西の塁線が土塁で囲繞されている。

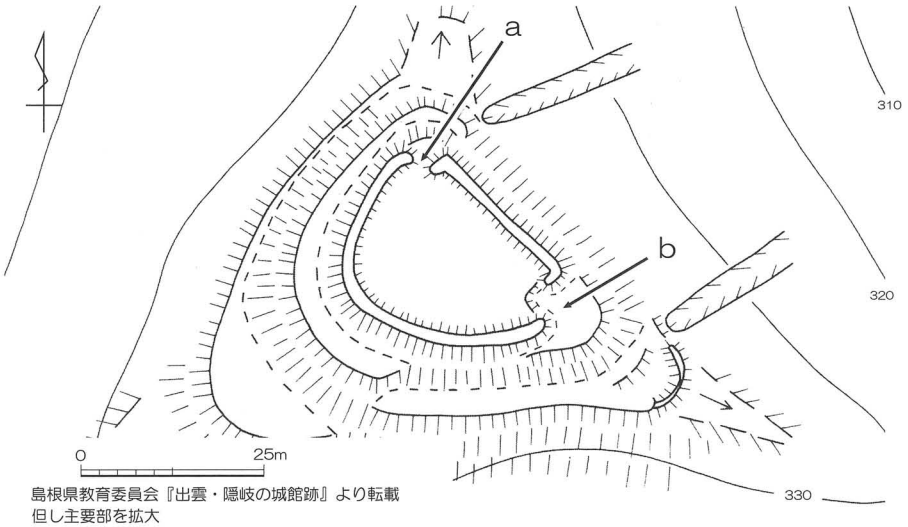
また、この曲輪の西側には馬出（うまだし）と見られる普請が施されていることが報告されている。（注５）馬出を伴う遺構は三刀屋町内では他に三刀屋じゃ山城跡があるだけで、いわゆる旧雲南三郡（飯石郡・大原郡・仁多郡）では、不確かなものも含めて他に５遺構が報告されているだけである。このうち三刀屋じゃ山城跡では、発掘調査によって、城域を画する西側に掘られた二重堀切はそれぞれ４穴からなる障子堀だったことが確認されている。（注６）当城は三刀屋尾崎城に移る以前の三刀屋氏の居城であったが、最終状態を見れば、障子堀をはじめとして在来の出雲国人の築城技法によるものではなく、毛利勢によって改修強化されたと考えるべきである。おそらく、馬出を伴う福谷城もまた毛利勢による修築を想定すべきであろう。

いまひとつ福谷城跡で注目しておきたい伝承がある。それは主郭の東側下方に周囲二丈ばかりの老松があって、これを首塚と言い伝えてきたということである。（注７）先に引用した小早川隆景書状のいう永禄13年１月28日に「切崩」した尼子方の「多久和両城」のうちの一城は、多久和本郷を見下ろすこの福谷城であった可能性が高い。

多久和城跡（直線距離にして約1.7km 北方）は、櫓台や連続竪堀などを伴う、周辺では小規模ながら完成された山城遺構（第22図参照）である。櫓台（第22図-a）から延ばされた土塁による防御ラインが確認できるが、土塁は廻らされてはいない。

当城は、多久和本郷の集落を東側から見下ろす丘陵先端（標高140m）に地取りしている。南麓には「市場」の地名も残る。天文９年（1540）の竹生島造営奉加帳には、尼子家臣団のうちの出雲州衆として多久和四郎太郎ほか多久和一族の名が見え、一族で多久和郷を分割して支配していたことが読み取れる。（注８）多久和城はその多久和氏の本城だったのであろう。それを前述のように１月28日に毛利勢が切り崩したのであり、現状は接収した毛利方によって改修された状態を伝えるものであろう。

つまり、多久和本郷の中央と南端にあたる多久和城と福谷城とを拠点として侵攻を阻止しようとした尼子方を撃破した後、毛利方ではこの「多久和両城」を接収して改修強化したと考えられる。



島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』より転載
但し主要部を拡大

第23図　茶臼山城縄張り図

そしてさらに、地域内の最高峰である高瀬山を占拠して高瀬山城を築城したのではあるまいか。

なお、やや遠方（直線距離にして約８km北西方）となるが、三刀屋町根波別所の茶臼山城跡（第23図参照）は山頂部（標高340m）の周囲を自然地形に沿って土塁で取り囲み、北端（第23図-a）と南西側（第23図-b）に虎口を開口させている。この虎口の先の緩斜面は駐屯空間と考えられるから、高瀬山城と同様な縄張り観による普請とみてよかろう。

当城は、北方は出雲市野尻町、北西に進むと見々久町から所原町、南西が佐田町名梅から朝原、南東は三刀屋町深谷から栗原への道が通ずるという位置に地取りしている。こうした地理的位置から、移動する兵員のために周囲に駐屯空間を広く取った繋ぎの城として築城されたと考えられている。

ひるがえって高瀬山城の地取りと比較してみると、茶臼山城跡は標高340mに対して比高は約40mであって交通路との高低差が比較的少ないのに対して、高瀬山城は240m程度もある。したがって、高瀬山城は直接的に交通路を押さえるのでもなく、駐屯空間も繋ぎの城としてのそれではなく高瀬山城に配置された番衆のためのものと考えられる。つまり、高瀬山城は、周辺随一の高地に地取りすることによって周囲にその威勢を顕示する役割を持たせられていた陣城と考えるべきであろう。

むすびにかえて

与えられた紙幅を超過してしまったが、ぜひ揚言しておきたいことがある。そもそも、高瀬山城の調査は教育委員会担当者の「念のために」という慎重さから始まった。概要を把握した後は、東西の曲輪群ともに雑木や下草を伐採していただき、その後に縄張り調査をすることができた。そして、その成果を下敷きにして発掘調査の範囲が確定された。つまり、残すべき遺構部分は広く残し、調査すべき範囲を限定してきちんと発掘調査をするという姿勢が貫かれたのである。このように、縄張り調査と発掘調査の連携のもとに、遺構を保存するとともに防災・減災という社会的要請に応えることができたことの意義はきわめて大きい。

今後とも、伝承であれ遺構の存在が疑われる場合は、ぜひ事前に精査して価値を判断してから調査を行ってほしいと切にお願いするものである。さらに、地域の貴重な文化財としてこの遺構を活用されるようお願いする次第である。

付記

本稿をなすにあたって、雲南市教育委員会の高橋誠二氏には最初の現地調査以来筆者のさまざまな要望に対して快くしかも丁寧に対応していただいた。また、島根県埋蔵文化財調査センターの東森晋氏には中近世城館跡分布調査カードの閲覧に便宜をはかっていただいた。とりわけ、三刀屋町内の城館跡調査に当たられた杉原清一氏と藤原友子氏には、貴重な現場での調査情報を提供していただいた。特記してあつく御礼を申しあげます。

注

（１）島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』1998年による。

（２）『萩藩閥閲録』巻115湯原文左衛門18　これとは別に、史料性は劣るが、『雲陽軍実記』は秋上伊織助らが多久和に「小

屋城」を築いて待ち受けたけれど、毛利の大兵を見て砦の小屋を自焼して退却したと記している。

（3）詳細は、宍道町教育委員会『宍道町の山城』1991年、同『宍道町史　史料編』1999年を参照されたい。

（4）三島雅之「一城別郭の山城について」『中世城郭研究』第18号所収　2004年

（5）中近世城館跡分布調査カード「福谷城跡」島根県埋蔵文化財調査センター架蔵と、杉原清一・藤原友子両氏のご教示による。

（6）三刀屋町教育委員会『三刀屋城跡調査報告書　Ⅱ』昭和58年、『同　Ⅲ』昭和59年、三刀屋城跡調査委員会『三刀屋氏とその城跡』昭和60年による。

（7）『雲陽誌』享保二年　飯石郡多久和古城山の項

（8）『日本歴史地名大系33　島根県の地名』1995年　飯石庄・多久和郷の項

付表　土塁を伴う城館遺構（出雲国）

・『出雲・隠岐』とその基礎とされた「島根県　中近世城館跡分布調査カード」に記載された調査成果より作成した。
・旧町村の遺構数は、幕末の台場は削除したが位置不明の場合はそのままとした。
・遺構が二町村以上にまたがる場合は、後出の遺構数から削除し、調査時点以降に確認された遺構数を加えた。(No欄は空白)

	城館跡名	所在地（旧名）	土　塁						空　堀			櫓台	その他の遺構 遺構数
NO.			塁線上	囲繞	登土塁	その他	不明	堀切	竪堀	連続竪堀	横堀		
		安来市											19
ア９	独松山城砦跡群	利弘町				○		○	○				
ア14	檀原城跡	上吉田町	○					○					虎口
ア19	京羅木山城砦跡群	植田町	○	○	○			○		○			
		伯太町											27
イ３	来見城跡	大字安田宮内	○										虎口
イ18	安田要害山城跡	大字安田	○			○		○					
イ19	豊岡城跡	大字豊岡	○					○				○	虎口
イ20	高守山城跡	大字井尻	○								○		虎口
イ21	平の城跡	大字井尻	○	○				○	○		○		
イ25	キリガマ城跡	大字横屋	○					○	○			○	虎口
イ27	社日山城跡	大字横屋	○					○	○				
イ28	シアケ城跡	大字井尻				○		○	○				
		広瀬町											28
ウ１	勝山城跡	大字石原	○	○		○		○		○			虎口
ウ４	富田城跡	大字富田	○		○	○		○				○	石垣　馬出　虎口
ウ６	明星寺塩谷城館跡群	大字富田	○	○				○				○	虎口
ウ10	道分城跡	大字東比田		○		○		○	○				馬出　虎口
ウ12	梶福留古城山城跡	大字梶福留		○									
ウ17	亀井ヶ成・誓願寺裏城砦跡群	大字広瀬、石原	○	○								○	
ウ18	大成山城砦跡群	大字広瀬	○									○	
ウ24	布弁城跡	大字布部				○		○	○			○	虎口
ウ25	布部城向城跡	大字布部					○						
ウ26	天馬城跡	大字上山佐		○				○	○				
ウ30	勝日山城跡	大字広瀬					○	○				○	
		松江市											46
エ２	城山城跡	上本庄町			○			○					
エ３	新庄城山城跡	新庄町	○					○？			○？		
エ５	真山城跡	法吉町		○									石垣
エ６	白鹿山城砦跡群	法吉町		○				○	○				虎口
エ８	海老山城跡	上佐陀町		○				○	○				
エ15	荒隈城跡	国屋町	○			○		○					
エ16	松江城跡	殿町				○		○					石垣　水堀　虎口　天守
エ21	稲葉城跡	西尾町		○				○	○				虎口
エ22	和久羅城跡	朝酌町			○								虎口
エ28	黒田館跡	大庭町		○									
エ31	亀畑山城跡	大垣町	○					○			○？		
エ32	土居城跡	上大野町	○	○				○	○	○	○	○	虎口
エ35	高柳城跡	薦津町					○						
エ38	坂本館跡	坂本町					○						
エ40	久多美山城跡	東忌部町			○	○		○	○				
エ41	西長江要害山城跡	西長江町	○					○				○	
	城山城	西忌部町	○					○					
	矢作山城跡	大垣町		○				○					

	城館跡名	所在地（旧名）	土　塁						空　堀			櫓台	その他の遺構 遺構数
NO.			塁線上	囲繞	登土塁	その他	不明	堀切	竪堀	連続竪堀	横堀		
		東出雲町											7
オ1	古城山城跡	大字出雲郷	○					○				○	虎口
オ3	春日城	大字春日	○					○		○			虎口
オ5	伝揖東氏館跡	大字下意東		○							○		
		八雲村											16
力6	禅定寺城跡	大字西岩坂		○				○		○			
力7	大石城跡	大字熊野				○		○					
	土井城跡	大字熊野		○	○			○					
	寺ノ奥城跡	大字熊野				○		○					
	城ヶ迫城跡	大字西岩坂				○		○					
	室山城跡	大字平原				○						○	
		玉湯町											10
キ2	林城山城跡	大字林村					○	○					
キ3	玉造要害山城跡	大字玉造	○		○			○	○			○	虎口
キ6	小谷要害山城跡	大字大谷					○						
キ7	大谷要害山城跡	大字大谷	○					○					
	廻り原山城跡	大字玉造	○					○		○			
		宍道町											15
ク1	丸倉山城跡	大字白石	○										
ク2	金山要害山城跡	大字白石	○					○	○	○		○	虎口　馬出
ク3	佐々布要害山城跡	大字佐々布	○		○			○					虎口
ク4	城山城跡と土居郭群	大字佐々布				○		○	○	○			虎口
ク6	掛屋山城跡	大字佐々布				○		○					
ク7	上野城跡	大字佐々布				○		○	○				
ク8	大平山城跡	大字上来待	○	○	○			○					
ク9	大森城跡	大字上来待	○					○					
	上野山城跡	大字上来待	○		○	○		○					
	空瀧戸城と城内館	大字上来待	○	○	○			○	○		○		
		美保関町											8
ケ2	鈴垂城跡	大字森山	○					○	○			○	
		島根町											7
		鹿島町											8
サ1	上講武殿山城跡	大字上講武				○		○					
サ2	大石山城跡	大字上講武				○		○					
サ6	薦山城跡	大字佐陀宮内	○	○	○	○		○					虎口
サ8	池平山城跡	大字佐陀本郷	○		○			○				○	虎口
サ10	氏穴遺跡	大字佐陀本郷	○										
		八束町											1
シ1	全隆寺城跡	大字波入		○									
		横田町											11
ス2	陣場城跡	大字中村	○					○					
ス3	藤ヶ瀬城跡	大字横田	○					○				○	虎口
ス4	土居屋敷跡	大字稲原					○						石垣
ス5	下横田城跡	大字下横田					○		○	○			虎口　馬出
ス11	夕景城跡	大字小馬木	○	○				○					石垣　虎口
		仁多町											16
セ1	鍋坂山城跡	大字高田	○										
セ2	西湯野城跡	大字亀嵩		○				○			○		

	城館跡名	所在地（旧名）	土　塁						空　堀			櫓台	その他の遺構 遺構数
NO.			塁線上	囲繞	登土塁	その他	不明	堀切	竪堀	連続竪堀	横堀		
セ4	大内原土居館跡	大字郡村					○						
セ10	松木山城跡	大字鴨倉					○	○					石垣　虎口
セ11	三沢城跡	大字三沢、鴨倉	○					○				○	石垣　虎口
セ12	布広城跡	大字三沢	○		○			○				○	
セ15	愛宕城跡	大字上阿井		○				○					
セ16	烏見城跡	大字上阿井	○					○	○	○		○	
		大東町											43
ソ2	諏訪城跡	大字須賀	○					○	○		○		虎口
ソ6	三笠城跡	大字南村	○										石垣　虎口
ソ7	高平城跡	大字南村	○					○	○			○	虎口
ソ10	岡田上城跡	大字幡屋					○	○					
ソ11	妙見寺城跡	大字仁和寺	○										
ソ12	高麻城跡	大字仁和寺	○					○		○			虎口
ソ17	岩熊城跡	大字養賀		○				○					
ソ25	小木戸城跡	大字下佐世					○	○					
ソ26	佐世城跡	大字下佐世	○	○	○			○				○	
ソ31	福富城跡	大字東阿用					○	○			○	○	虎口
ソ32	阿用城跡	大字東阿用	○	○				○					虎口
ソ34	城戸城跡	大字西阿用		○				○					虎口
ソ43	寺山城跡	大字上久野	○										
		加茂町											23
タ4	城平山城跡	大字大竹				○		○					
タ5	奥垣内城跡	大字猪尾	○										
タ6	猪尾城跡	大字猪尾、大崎		○				○	○				
タ9	尾添の上城跡	大字加茂中	○										
タ13	土居城跡	大字神原	○					○					
タ20	近松城跡	大字近松	○		○			○					
		木次町											15
チ9	王守山城跡	大字寺領	○	○				○	○				
		三刀屋町											55
ツ10	三刀屋じゃ山城跡	大字古城	○	○				○	○				虎口　馬出
ツ14	三刀屋尾崎城跡	大字古城	○		○			○				○	石垣　虎口
ツ30	多久和城跡	大字多久和	○		○			○		○			虎口
ツ33	高瀬山城跡	大字多久和	○	○				○	○				虎口
ツ35	六重城跡	大字六重	○					○	○				
ツ37	福谷城跡	大字多久和	○	○				○					馬出
ツ41	茶臼山城跡	大字根波別所		○					○				
ツ54	須所八幡山城跡	大字須所					○	○					
		掛合町											5
テ5	陣ヶ丸城跡	大字松笠	○	○				○					
テ6	日倉山城跡	大字掛合	○						○			○	虎口
テ8	熊野城跡	大字波多	○	○	○			○	○			○	
		頓原町											50
ト1	要害山城跡	大字都加賀	○					○				○	
ト2	竹岡城跡	大字花栗	○	○				○					虎口
ト4	祇園山城跡	大字花栗	○						○			○	
ト7	社日山城跡	大字頓原村	○	○				○	○			○	
ト9	矢櫃城跡	大字頓原村	○					○				○	
ト10	草ノ城跡	大字頓原村					○	○					

	城館跡名	所在地（旧名）	土　塁						空　堀			櫓台	その他の遺構 遺構数
NO.			塁線上	囲繞	登土塁	その他	不明	堀切	竪堀	連続竪堀	横堀		
ト11	角井城砦跡群	大字角井	○					○		○		○	虎口
ト14	宇杉城	大字八神	○	○									虎口
ト15	勘ノ浦城跡	大字八神			○			○	○			○	
ト16	上宇杉城跡	大字八神		○					○				
ト17	坂根城跡	大字八神		○									
ト20	長谷城跡	大字長谷					○	○					
ト24	権現西城跡	大字角井					○						
ト28	東原小丸城跡	大字角井	○	○									
ト29	東原南城跡	大字角井		○									
ト30	大覚城跡	大字八神					○						
ト31	若杉城跡	大字八神					○						
ト34	段原城跡	大字都加賀		○									
ト37	小才田城砦跡群	大字頓原村	○			○		○					
ト38	門城跡	大字花栗	○										
ト39	瀬戸城跡	大字花栗				○							
ト40	天神山城跡	大字花栗	○			○							
ト41	観音寺城砦跡群	大字頓原村	○			○		○					
ト43	松ノ前城砦跡群	大字頓原村	○	○									
ト44	内谷口城跡	大字頓原村	○			○							
ト45	武智城砦跡群	大字頓原村	○										
ト49	下古城跡	大字頓原村	○										
		赤来町											13
ナ２	和田城跡	大字小田		○				○					馬出？
ナ３	要城跡	大字真木		○									
ナ４	並下子城跡	大字野萱					○				○？		
ナ５	賀田城跡	大字下来島	○	○									馬出
ナ７	杉谷城跡	大字下赤名	○					○				○	馬出？　虎口
ナ９	瀬戸山城跡	大字下赤名	○	○				○	○				虎口　石垣
ナ11	井戸城跡	大字井戸谷		○		○		○					
ナ12	武名ケ平城跡	大字赤名	○										
ナ13	元山城跡	大字赤名	○	○				○	○				虎口
		吉田村											4
ニ２	上山城跡	大字上山		○									
		出雲市											24
ヌ２	鳶ヶ巣城跡	西林木町	○	○					○				虎口
ヌ４	三木氏館跡	小山町		○									
ヌ６	神西城跡	東神西町	○		○			○					虎口
ヌ10	浄音寺境内館跡	塩冶町		○									
ヌ11	権現山城跡	上塩冶町		○									掘立柱建物
ヌ14	半分城跡	上塩冶町		○						○			
ヌ18	向山城跡	上塩冶町	○					○					虎口
ヌ19	栗栖城跡	古志町	○					○					
ヌ20	浄土寺山城跡	下古志町	○					○					虎口
ヌ22	唐墨城跡	朝山町	○			○		○					
ヌ23	姉山城跡	朝山町		○									
		平田市											41
ネ１	横山城跡	鹿園寺町		○				○					
ネ２	松尾山城跡	小境町				○		○	○				虎口　馬出
ネ５	中垣城跡	鹿園寺町		○									

	城館跡名	所在地（旧名）	土　塁						空　堀			櫓台	その他の遺構 遺構数
NO.			塁線上	囲繞	登土塁	その他	不明	堀切	竪堀	連続竪堀	横堀		
ネ7	八幡山城跡	野石谷町		○				○	○	○			虎口
ネ9	要害城跡	万田町	○										
ネ10	口宇賀城跡	口宇賀町		○				○					
ネ12	平田城跡	平田町	○					○					
ネ14	桧ヶ仙城跡	多久町	○					○					
ネ19	古殿土居跡	多久谷町					○						
ネ32	西ノ谷城跡	久多美町		○	○			○					虎口
ネ34	西巻土居跡	口宇賀町					○						
ネ35	万田地頭瀬館跡	万田町					○						
ネ37	東郷地頭瀬館跡	東郷町					○						
	寄居城跡	十六島町		○				○					
		斐川町											16
ノ3	宇屋谷城跡	大字神庭	○	○				○					
ノ4	高瀬城跡	大字学頭	○					○	○				虎口
ノ10	結城跡	大字直江	○										虎口
ノ11	大井城跡	大字学頭	○					○					
		大社町											5
ハ2	日御碕蛇山城跡	大字日御碕					○						
	宇龍城跡	大字日御碕	○	○				○					
		佐田町											46
ヒ2	石宇城山城跡	大字朝原	○					○	○	○		○	
ヒ3	立花城跡	大字宮内	○					○		○		○	
ヒ4	尾崎山城跡	大字宮内	○					○	○				虎口
ヒ5	高櫓城跡	大字反辺	○					○		○			
ヒ6	屏風山城跡	大字反辺	○					○				○	
ヒ8	茶磨山城跡	大字大呂	○		○			○	○	○		○	
ヒ10	竜体谷城跡	大字大呂	○					○				○	石垣
ヒ11	八幡山城跡	大字大呂		○						○			
ヒ13	吉栗山城跡	大字一窪田	○					○					
ヒ14	伊秩城跡	大字一窪田	○						○	○		○	虎口　馬出
ヒ19	横見城跡	大字上橋波	○	○				○					
ヒ23	後谷城砦跡群	大字毛津	○	○				○					
ヒ31	輪の内城跡	大字東村	○	○				○	○				
ヒ34	高丸城跡	大字大呂	○	○		○		○	○				
ヒ36	前岩瀬城跡	大字大呂	○	○									
ヒ37	重羅城跡	大字大呂	○										
ヒ39	大山城砦跡群	大字大呂		○					○				
ヒ40	城田山城跡	大字高津屋	○										
ヒ42	坂本堂床城跡	大字大呂		○									
ヒ43	東浦城跡	大字大呂		○									
		湖陵町											5
フ4	要害山城跡	大字二部	○						○	○			虎口
		多伎町											6
ヘ2	富士ヶ城跡	大字小田	○					○				○	虎口
ヘ3	要害山城跡	大字口田儀					○						
ヘ4	鶴ヶ城跡	大字口田儀	○					○	○				石垣

（山根正明）

第2節　まとめ

第１・２次発掘調査および自然科学分析の結果、高瀬山城跡には弥生時代前期・古代・中世の遺構・遺物の存在が判明した。よって、以下、各時代について検討する。

（１）弥生時代前期

この時代の遺構はみつかっていないが、第１次調査のＢ区－②の遺物包含層から８点の土器片が出土した。出土した土器には、口縁端面に刻目を施すもの（第７図１）と、口縁端部を丸く仕上げるもの（第７図２）があることから、個体数は２個以上である。

出土地点は、標高約415m、傾斜角35度前後の急峻な斜面に位置する。飯石川との比高差は約200m、東側を流れる斐伊川との比高差は300m 以上である。

市内に12箇所（表３）ある、当該期の遺跡のうち、10箇所は河岸段丘上や河川沿いの丘陵に位置する。しかし、残りの２箇所は、標高320m 前後の山頂付近に位置し、河岸段丘との比高差も140m程度と、立地的には高瀬山城跡に近い。

しかし、高所に位置する遺跡はもちろんのこと、河岸段丘上の遺跡についても、遺跡の詳細が判明していない。そのため、今後の調査によって、立地以外の相違点が、明らかになることを期待したい。

（２）古代

第２次調査区、南東隅の土塁直下で発見した土坑内の炭化木片を年代測定したところ、９世紀後半の結果がえられた。この遺構以外、古代の遺構・遺物は見つかっていない。

この土抗は、底部直上に焼土が堆積していることと、多量の炭を包含することから、土抗内で火を炊いたことは明白であるが、その目的については分からない。

第４表　雲南市内にある弥生前期の遺跡一覧

遺跡名	所在地	立地	標高（m）	出土地	概要
平田遺跡	木次町平田石	河岸段丘	約133	遺構外	土器片が出土。（報告書の掲載数は９点）
家の後Ⅰ遺跡	木次町北原	河岸段丘	約151	遺構外	土器片が出土。（報告書の掲載数は３点）
垣ノ内遺跡	木次町北原	河岸段丘	約180	遺構外	土器片が４点出土。
川平Ⅰ遺跡	木次町平田	河岸段丘	約160	遺構外	土器片が出土。（報告書の掲載数は２点）
宮ノ脇遺跡	木次町北原	河岸段丘	約164	遺構外	土器片が１点出土。
槙ヶ峠遺跡	木次町北原尾崎	丘陵	約215	遺構外	土器片が出土。（報告書の掲載数は１点） （北側、河岸段丘の標高は約165m）
北原本郷遺跡	木次町北原本郷	河岸段丘	約156	遺構外	土器片が出土。（２冊の報告書に掲載されている総数は30点）
家の後Ⅱ遺跡	木次町北原本郷	河岸段丘	約157	遺構外	土器片が出土。（２冊の報告書に掲載されている総数は16点）
要害遺跡	三刀屋町下熊谷	丘陵	約95	溝	丘陵尾根を分断する断面「Ｖ」字形の溝の底部から、２個体分の土器片と円礫が出土。 （西側、河岸段丘の標高は約40m）
六重下遺跡	三刀屋町六重	河岸段丘	約200	遺構外	土器片が２点出土。
羽森１号鈩跡	掛合町多根	丘陵	321	土坑	土器片が１点出土。 （北側、河岸段丘の標高は約160m、南側は約180m）
羽森第２遺跡	掛合町多根	丘陵	319	遺構外	土器片が１点出土。 （北側、河岸段丘の標高は約160m、南側は約180m）

（3）中世

第２次調査地の表土直下から出土した、15～16世紀初頭の遺物は、曲輪の利用時期を示すものと考えられる。また、南北セクションA－A′６層の南側から出土した炭化木片を年代測定したところ、13世紀中頃～後半との結果がえられた。よって、曲輪の普請は、これ以降に行った可能性が高い。なお、第１次調査地内から、この時期の遺物は出土していない。

第１次調査で確認した遺構は堀切だけであるが、第２次調査では土塁、土坑、小穴、石列、集石を確認した。なお、いずれの遺構からも遺物は出土していない。

堀切

堀切は、第１次調査のＢ区－②で薬研堀を確認した。この堀の西側は山の斜面、東側は盛土で構築している。東側の盛土は、地山ブロックを多量に包含することから、堀切を掘削した時の土を盛って構築したもの考えられる。

また、Ａ区－①の地山断面は「U」字形、A－④は「凹」形を呈する。そのため、これらを堀切の断面形式に分類した場合、前者は「毛抜堀」、後者は「箱堀」の可能性が考えられる。

土塁

第２次調査区の周縁部を、ほぼ全周していた。土塁の堆積状況は５箇所で確認したが、そのいずれの地点からも、３層の褐色系の土と４層の黒色系の土が確認できたので、盛土と判断した。現存する土塁の高さは東側で20cm程度あるが、調査区の西隅では曲輪との比高差はなくなる。

土塁は、地山を掘り下げた後に構築している。また、３層の表面は中心部に比べ締まっている。

土坑

SK01は、底部直上に堆積する４層に、多量の炭が包含されていることから、火炊きに利用されたものと考えられる。ただ、遺物もなく、曲輪内の整地土の上面から掘り込んでいるため、中世以降の可能性もある。

小穴

小穴は、調査区の南側中央に集中するＰ１～21と、土塁沿いに点在するP22～26の２群を確認した。

Ｐ１～21は、３方向の並びを確認したが、Ｐ９のように、南北筋か東西筋か、断定できないものがある。また、Ｐ１～３・13・14・21の６穴は、地山の岩盤を掘削しているが、曲輪内の地山は、岩盤もしくは固く締まった粘土質であった。

P22～26は、盛土沿いに位置することから、柵列の可能性が考えられる。

石列

石列ａは土塁の外側裾部、石列ｂ・ｃは土塁の盛土内に位置することから、土塁築造時に関係するものと思われる。

石列ｄは土塁上面、石列ｅは曲輪と土塁の境界付近で発見した。この２つの石列は、土塁の表面に点在することから、土塁を保護する目的で置いた可能性は考えられる（注１）。しかし、現存の状態では、その目的を果たせていないように思われる。

集積

集積１は、調査区の南東隅部の、土塁表面に山積していたことから、土塁を保護する目的で置いた可能性が考えられる。

集積２は、調査区の北側に位置する。石は、地山直上から曲輪内の整地土までの各層に包含されている。この集積は、曲輪内の排水を良くするために混入させたとも考えられるが、ただ単に、地山整形時に出た石を積み置いた可能性もある。

（注１）小都隆氏にご教示いただいた。

参考文献

松本岩雄　1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

関和彦　2006年『出雲国風土記註論』明石書店

加茂町　1984『加茂町誌』

島根県教育委員会　2003『増補改訂　島根県遺跡地図』Ⅰ（出雲・隠岐編）

島根県教育委員会ほか　2003『尾白Ⅰ遺跡　家ノ脇Ⅱ遺跡３区　尾白Ⅱ遺跡　川平Ⅰ遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１』

島根県教育委員会ほか　2003『家の後Ⅰ遺跡　垣ノ内遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２』

島根県教育委員会ほか　2004『槙ヶ峠遺跡　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３』

島根県教育委員会ほか　2005『宮ノ脇遺跡　家の後Ⅱ遺跡１　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６』

島根県教育委員会ほか　2005『北原本郷遺跡１　－１～３・６区の調査－　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７』

島根県教育委員会ほか　2007『家の後Ⅱ遺跡２　北原本郷遺跡２　尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書９』

島根県教育委員会ほか　2001『熊谷遺跡・要害遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内文化財発掘調査報告書13』

島根県教育委員会ほか　2001『馬場遺跡発掘調査報告書　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内文化財発掘調査報告書14』

島根県教育委員会ほか　2009『長畑ヶ遺跡　下熊谷上遺跡　清水ヶ平遺跡　六重下遺跡　長者畑遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内文化財発掘調査報告書15』

島根県教育委員会ほか　2009『六重城南遺跡　瀧坂遺跡　鉄穴内遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内文化財発掘調査報告書16』

島根県教育委員会・加茂町教育委員会　2002『加茂岩倉遺跡』

島根県掛合町教育委員会　1997『飯石地区農道離着陸場整備事業に伴う羽森城跡・羽森１号鈩発掘調査報告書』

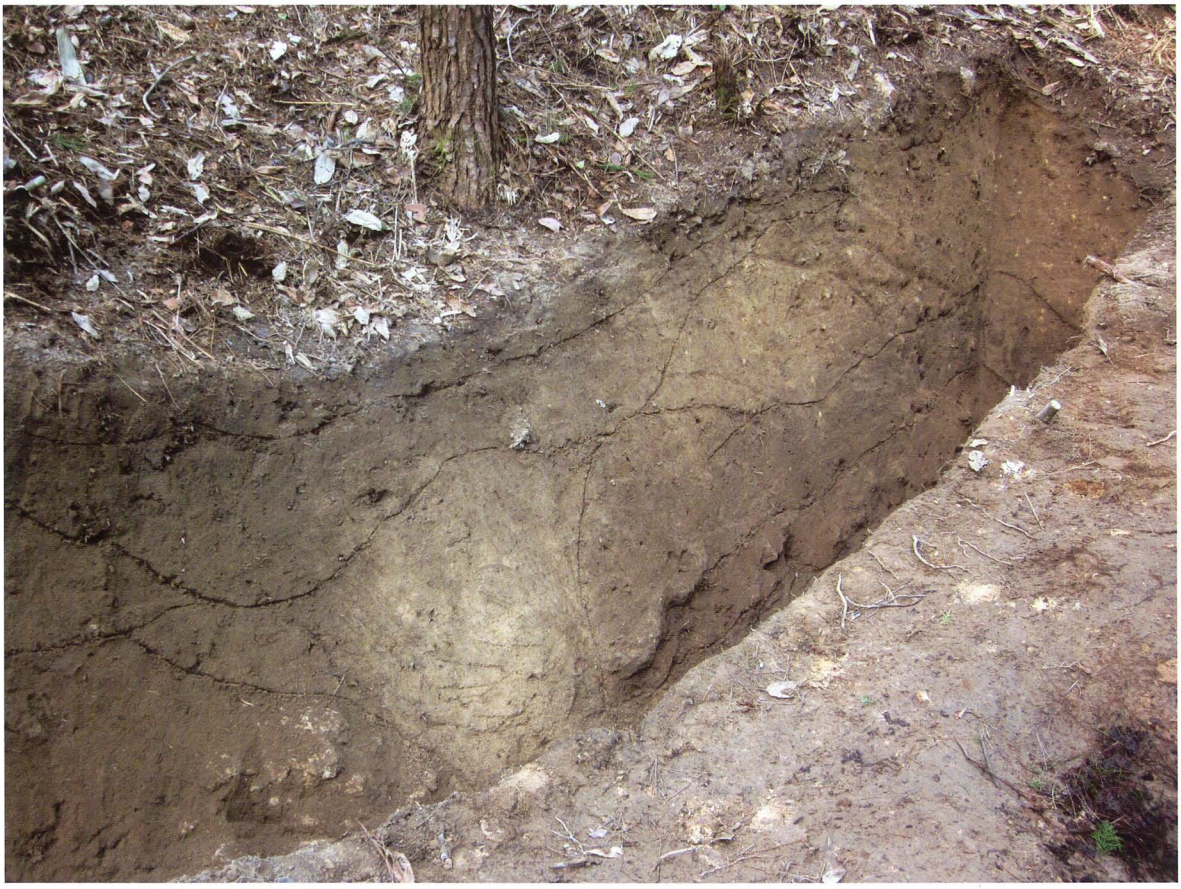
島根県掛合町教育委員会　1998『飯石地区農道離着陸場整備事業に伴う羽森第２、羽森第３遺跡発掘調査報告書』

島根県木次町教育委員会ほか　2000『平田遺跡　第Ⅲ調査区　斐伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

雲南市教育委員会　2010『郡垣遺跡遺跡Ⅰ（旧大原郡家等官衙関連遺跡）』

写　真　図　版

Ｂ区－①調査前（北東から）



Ｂ区－①土層断面（南西から）

図版 2

B区ー②の盛土（西から）

B区ー②遺物出土状況（東から）

A区ー④完掘後（南東から）

A区ー②土層断面（北西から）

図版 4

第 2 次調査区トレンチ状況（南から）

第 2 次調査区完掘後（南から）

Ａ－Ａ′北側の土層断面（南東から）

Ｂ－Ｂ′西側土塁の土層断面（南から）

図版 6

石列ｄ・ｅ及び集石１（北西から）

石列ａ全景（西から）

SK02調査前（北から）

小穴 P12～14（東から）

図版８－１

図版８－２

報告書抄録

ふりがな	たかせやまじょうせき
書名	高瀬山城跡
副書名	消防救急デジタル無線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	雲南市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	高橋誠二・山根正明・渡邉正巳
編集機関	雲南市教育委員会
所在地	〒699－1392　島根県雲南市木次町木次1013－1　TEL　0854－40－1073
発行年月日	2013（平成25）年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高瀬山城跡	島根県（しまねけん）雲南市（うんなんし）三刀屋町（みとやちょう）多久和（たくわ）	32091	R33	35°14′38″	132°53′8″	20111207～20120510	38m²	林道建設
						20120719～20121102	150m²	無線基地局建設

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高瀬山城跡	散布地 中世	弥生 室町	遺物包含層 堀切 土塁	弥生土器 陶磁器	

要約

高瀬山城跡は、これまで、「明確な遺構は存在しない」と考えられてきたが、今回の調査で、堀切や土塁などの遺構を確認した。また、曲輪内の表土直下からは15～16世紀初頭の陶磁器片が出土した。

山城以外の遺構・遺物としては、弥生時代前期の土器片や、土塁直下から多量の炭を包含する土坑を確認した。この土坑から出土した炭化木片をAMS年代測定したところ、9世紀後半との結果がえられた。

雲南市埋蔵文化財調査報告書 7

高瀬山城跡

消防救急デジタル無線整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行　平成 25 年 3 月

編集　島根県雲南市教育委員会

島根県雲南市木次町木次1013-1

印刷　㈱　報　光　社